令和７年度

山口大学の FD 報告書

山口大学 教育・学生支援機構

山 口 大 学　教 学 委 員 会

Ⅰ．全学のＦＤ

１．教育・学生支援機構関連のＦＤ ……1
２．共通教育授業科目別部会のＦＤ ……7
３．学生授業評価及び教員授業自己評価 ……8

Ⅱ．学部・研究科のＦＤ

１．人文学部のＦＤ……14
２．教育学部のＦＤ……16
３．経済学部のＦＤ……19
４．理学部のＦＤ……21
５．医学部のＦＤ……28
６．工学部のＦＤ……38
７．農学部のＦＤ……41
８．共同獣医学部のＦＤ……45
９．国際総合科学部のＦＤ……51
１０．ひと・まち未来共創学環のＦＤ ……54
１１．人文科学研究科のＦＤ……56
１２．教育学研究科のＦＤ……58
１３．経済学研究科のＦＤ……62
１４．医学系研究科のＦＤ……63
１５．創成科学研究科のＦＤ……64
１６．東アジア研究科のＦＤ……65
１７．技術経営研究科のＦＤ……68
１８．共同獣医学研究科のＦＤ……71

令和７年度 山口大学 教学委員会名簿

山口大学 各学部・研究科教育改善コーディネータ名簿

山口大学 教学マネジメント室名簿

Ⅰ．全学の FD

＜１．教育・学生支援機構関連のFD＞

（１）全学FD・SD講演会

開催日時	2025年5月15日（木）	**開催場所**	共通教育棟会議室
テーマ	大学職員の業務への理解		
講師	岩野摩耶 （山口大学　教育・学生支援機構 教学マネジメント室　講師） 藤本正己 （山口大学　教育・学生支援機構 教学マネジメント室　講師）	**参加者**	教職員25名

研修内容

「大学職員の業務への理解」と題して、①大学を取り巻く環境、②大学職員の業務の特徴、③大学職員に求められる意識と行動について解説を行った。また、参加者同士で、今後の業務への取り組み方について考える機会としてもらうため、グループワークも交えて交流を行った。

開催日時	2026年2月16日（月）	**開催場所**	大学会館
テーマ	データ活用の基礎　－IRのはじめの一歩－		
講師	Salesforce Japan Co.,Ltd.	**参加者**	教職員30名

研修内容

教育・学生指導への活用に向けて役立つ「データの扱い方の基本」を学ぶ初心者向けの講座をして開催した。「IR、データ活用は難しそう」という先入観を払拭するため、難しい統計学ではなく、手元のデータをどう整理し、どう読み解くのかに焦点を当てて解説した。データ活用を身近な「道具」として使いこなし、根拠を持った確かなデータ活用術を一緒に身につけるため、グループでのデータの解釈、実践も実施した。

（２）その他の研修

開催日時	2025 年 4 月 2 日（水）	**開催場所**	吉田地区メディア講義室 （オンライン同時開催）
テーマ	教学マネジメントの基礎と実務		
講師	葛崎偉 氏 （山口大学 副学長(教育学生担当) 岡田菜緒子 氏 （山口大学 学生支援センター 准教授） 岩野摩耶 氏 （山口大学 教学マネジメント室 講師）	**参加者**	－ （オンデマンドでも配信）

研修内容

新任教員を対象として，本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し，本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に，大学運営に関する理解を深めることを目的に実施した。なお、本研修は大学主催で総務企画部人事課と共同実施をしているため、教育・学生支援機構は、後半部分を以下のテーマを担当した。

・教育・学生支援について （葛崎偉 氏）
・障害等のある学生の修学支援について （岡田菜緒子 氏）
・高等教育の動向、授業設計と授業方法 （藤本正己 氏）

開催日時	2025 年 4 月 4 日（金）	**開催場所**	オンライン
テーマ	ＴＡ・ＳＡ研修会		
講師	藤本正己 氏 （山口大学 教育マネジメント室 講師） 岡田菜穂子 氏 （山口大学 学生支援センター・ 学生特別支援室 准教授） 森本宏志 氏 （全学労働安全衛生管理室主任・ 保健管理センター 准教授）	**参加者**	教職員 33 名 学生　479 名

研修内容

TA・SA として初めて採用される者および担当教員を対象として、TA・SA としての心構えや注意事項を理解してもらうことを目的に実施した。

以下の 3 つのセッションについて解説を行い、終了後にはアンケートとクイズを実施した。

・学びのサポーターとしての TA・SA　（藤本正己　氏）
・障害等のある学生への配慮について　（岡田菜穂子　氏）
・大学の授業における安全衛生　（森本宏志　氏）

開催日時	2025 年 4 月 23 日（水）	**開催場所**	オンライン
テーマ	教育改善コーディネーター研修会		
講師	岩野摩耶 氏 （山口大学 教学マネジメント室 講師）	**参加者**	教職員 16 名
研修内容 2024 年度の教育・学生支援機構主催の FD 計画について説明するとともに、各学部で FD 計画を立てる際に留意すべき点や FD 予算要求の際の注意点などについて研修及び協議を行った。			

＜特別開催＞

開催日時	2026 年 2 月 18 日（水）	**開催場所**	共通教育 16 番教室＋オンライン （ハイブリッド開催）
テーマ	【山口大学・山口県立大学・山口学芸大学　FD 研修】 ハイフレックス型授業の質を高めるために		
講師	重田勝介 氏 （北海道大学情報基盤センター 教授）	**参加者**	教職員 50 名
研修内容 山口大学、山口県立大学、山口学芸大学の三大学では、「地域活性化人材育成事業」（SPARC）を通じ、文系 DX 人材に必要な資質・能力を身に付けるための「SPARC 教育プログラム」を展開している。SPARC 教育プログラムでは、複数の大学の学生同士が学ぶ授業を実施しており、対面で授業を受ける学生もいれば、オンラインで授業を受ける学生もいる。 研修では、複数の大学の学生が同一の授業を対面とオンラインで同時に学ぶハイフレックス型の授業に焦点をあて、その特徴や課題、対策について探る。 講演後に「課題の対応策の議論」を行った。このセッションでは、実際に授業を実施した 3 名の教員が状況や課題を報告し、講師・参加者と議論を行った。			

（３）教育改善 FD 研修会

開催日時	2025 年後期	**開催場所**	対面あるいはオンライン
テーマ	教育改善 FD 研修会（各学部）		
講師	藤本正己 氏 （山口大学 教育マネジメント室 講師） 岩野摩耶 氏 （山口大学 教育マネジメント室 講師）	**参加者**	教員 618 名

研修内容

各学部・研究科の卒業後の学生への追跡調査の結果の報告を行った。特色のある項目については、在学生（在学中や卒業時）の調査結果との比較も行い、各学部・研究科教員との意見交換を通して、今後の教育の充実について検討した。

＜実施日程＞

2025 年 9 月 10 日	理学部・創成科学研究科
2025 年 9 月 17 日	人文学部・人文科学研究科
2025 年 10 月 15 日	教育学部・教育学研究科
2025 年 10 月 22 日	医学部医学科・医学系研究科
2025 年 11 月 12 日	工学部・創成科学研究科
2025 年 12 月 3 日	医学部保健学科・医学系研究科
2025 年 12 月 17 日	農学部・創成科学研究科
2026 年 1 月 13 日	技術経営研究科
2026 年 1 月 21 日	共同獣医学部・共同獣医科学研究科
2026 年 2 月 18 日	国際総合科学部
2026 年 3 月 4 日	ひと・まち未来共創学環
2026 年 3 月 18 日	経済学部・経済学研究科

（4）大学教育セミナー・大学マネジメントセミナー ※大学リーグ主催

開催日時	2025 年 10 月 21 日（火）	**開催場所**	大学会館
テーマ	【大学マネジメントセミナー】 教職協働、その始まりはわたしから		
講師	野口里美 氏 （香川大学 理事・副学長(企画・評価・ダイバーシティ担当)）	**参加者**	教職員 36 名

研修内容

大学職員として 40 年あまり現場を歩んできた講師の経験談を交えながら、前半は職員としてのあり方や教員との関係づくりについて解説した。研修をきっかけに「教職協働って、だれから始めるの？」について参加者同士で考えた。後半はコミュニケーションツール（SP トランプ）を活用したワークを実施し、自分自身の特性や他者との違いを体験的に理解し、人との関わり方を見直す気づきを得た。教職協働だけでなく、これから職員として歩む日々に役立つヒントを探すことを目指した。

開催日時	2025 年 8 月 7 日（木）	**開催場所**	オンライン
テーマ	【大学教育セミナー】 授業デザインの基礎知識		
講師	竹中 喜一 氏 （近畿大学 IR・教育支援センター 准教授）	**参加者**	教職員 17 名

研修内容

『2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）』や『教学マネジメント指針』等を通して学修者本位の教育への転換が必要とされている。本研修会は、新任・若手教員のキャリア育成を行うために、「自己の担当する授業科目」の振り返りを行い，授業改善を行う力を養成することを目的として実施した。2 つのセッションに分けて実施し、セッション 1 では「15 回の授業の設計方法」、セッション 2 では「90 分の授業の設計」について学ぶことで自らの教育力向上を目指した。

セッション 1：「15 回の授業を設計する」 近年の学修者中心の教育動向を踏まえ、授業の到達目標やカリキュラム全体を意識 した授業を設計する基本をおさえる

セッション２：「90 分の授業を設計する」 90 分の授業の導入、展開、まとめ、事前事後学習、成績評価の要点をおさえる

（５）講師派遣型 FD 研修会

開催日時	2025 年 11 月 19 日（水）	**開催場所**	農学部
講師	林寛子　氏 （アドミッションセンター准教授）	**参加者**	教職員 24 名
テーマ	今日の状況を踏まえた入試改善の方向性 ～3 つの観点を柱とした多面的・総合的な評価と入試戦略を考える～		

研修内容

大学入試の現状や高校の教育課程がどのように変化したのか、また、それらの状況を踏まえ、大学入試にはどのような改善・改革が求められているのかを確認しながら、これからの入試戦略や作問における注意点について参加者と考えた。



開催日時	2026 年 2 月 10 日（火）	**開催場所**	ひと・まち未来共創学環
テーマ	障害等のある学生の支援ニーズと配慮の動向		
講師	岡田菜穂子　氏 （学生特別支援室支援 コーディネーター　准教授）	**参加者**	教職員 21 名

研修内容

障害等のある学生のニーズは増加・多様化の傾向にあり、合理的配慮として求められる内容も幅広くなってきた。研修では、最近の支援ニーズと配慮の動向を外観し、今後の合理的配慮実施に向けての意見交換を行った。



＜２．共通教育授業科目別部会のＦＤ＞

ＦＤ活動を実施した授業科目別部会

（１）運動健康科学部会
2026 年 3 月中旬に部会のメンバーで対面の会議を行い、来年度の部会体制の確認および次年度への申し送りを行った

（２）英語部会
主に非常勤講師に向けて、オンラインでＦＤ研修会を開催し、新しい評価方法についての説明と、シラバスの入力方法の講習を行った。参加できなかった先生には、当日録画した動画を共有して視聴を促した。

（３）数学部会
プレースメントテストを実施し，受講生のクラス分けを行った．今年度も例年通り約６０点より上位と下位にクラス分けを行うことができた．このクラス分けにより講義等に影響が出る懸念があるので，部会員の間で情報共有を諮った．

（４）物理学部会
物理学Ⅰ（前期）とⅡ（後期）の受講者数の差について、ヒアリングによりその理由を探った。物理学Ⅱ（農）の受講者が物理学Ⅰ（農）に比べて極端に減少していたが、選択科目のため後期は他の科目を履修する人が大半であり、農学部なので物理はあまり選択する人がいない。しかしその中でも他の科目を落とした時のためにもう一科目保険として選択している人が少数いてそれが物理学Ⅱ（農）の受講者ということであった。講義レベルとしては今のままでよいということも学生へのヒアリングから確認した。

（５）化学部会
各部局において、担当者にＦＤを実施していただいた。

（６）生物部会
各部局および担当者ごとにＦＤを実施してもらった。

（７）地球科学部会
教育支援センターや学部主催のＦＤ研修会への出席

（８）日本国憲法部会
部会長という立場より成績評価に当たっては著しい偏りのないよう注意喚起を行った

＜３．学生授業評価及び教員授業自己評価＞

【学生授業評価】

１．実施方法

学生授業評価は、山口大学修学支援システムにより実施している。一部の学科や科目では、独自のシステムを利用した学生授業評価を行っている。それらの学科や科目の結果は反映されていない。

各科目の集計結果は、担当教員にフィードバックされ、教員個人の授業改善に活かされるとともに、各学部等における FD 活動やカリキュラム改善等にも活用されている。

２．質問紙

Q1　あなたは、この授業にどれくらい**出席**しましたか？（括弧の数字は 15 回授業の場合の出席回数参考値）

①90％以上（14 回以上）　②80％～90％未満（12～13 回）
③60％以上～80％未満（9～11 回）　④40％以上～60％未満（6～8 回）
⑤40％未満（6 回未満）

Q2　あなたは、この授業において、**授業時間外学習**（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？　総時間を平均し、授業 1 回あたりの時間に換算してお答えください。

①3～4 時間程度又はそれ以上　②2 時間程度　③1 時間程度　④30～50 分程度　⑤30 分未満

Q3　あなたは、この**授業の内容を理解**できましたか？

①そう思う　②ややそう思う　③どちらとも言えない
④あまりそう思わない　⑤そう思わない

Q4　Q3 で回答した判断理由を教えてください。

（　　）

Q5　あなたは、シラバスに記載された**到達目標を達成**したと思いますか？

①そう思う　②ややそう思う　③どちらとも言えない
④あまりそう思わない　⑤そう思わない

Q6　Q5 で回答した判断理由を教えてください。

（　　）

Q7　あなたは，この授業について**満足**しましたか？

①そう思う　②ややそう思う　③どちらとも言えない
④あまりそう思わない　⑤そう思わない

Q8　Q7 で回答した判断理由を教えてください。

（　　）

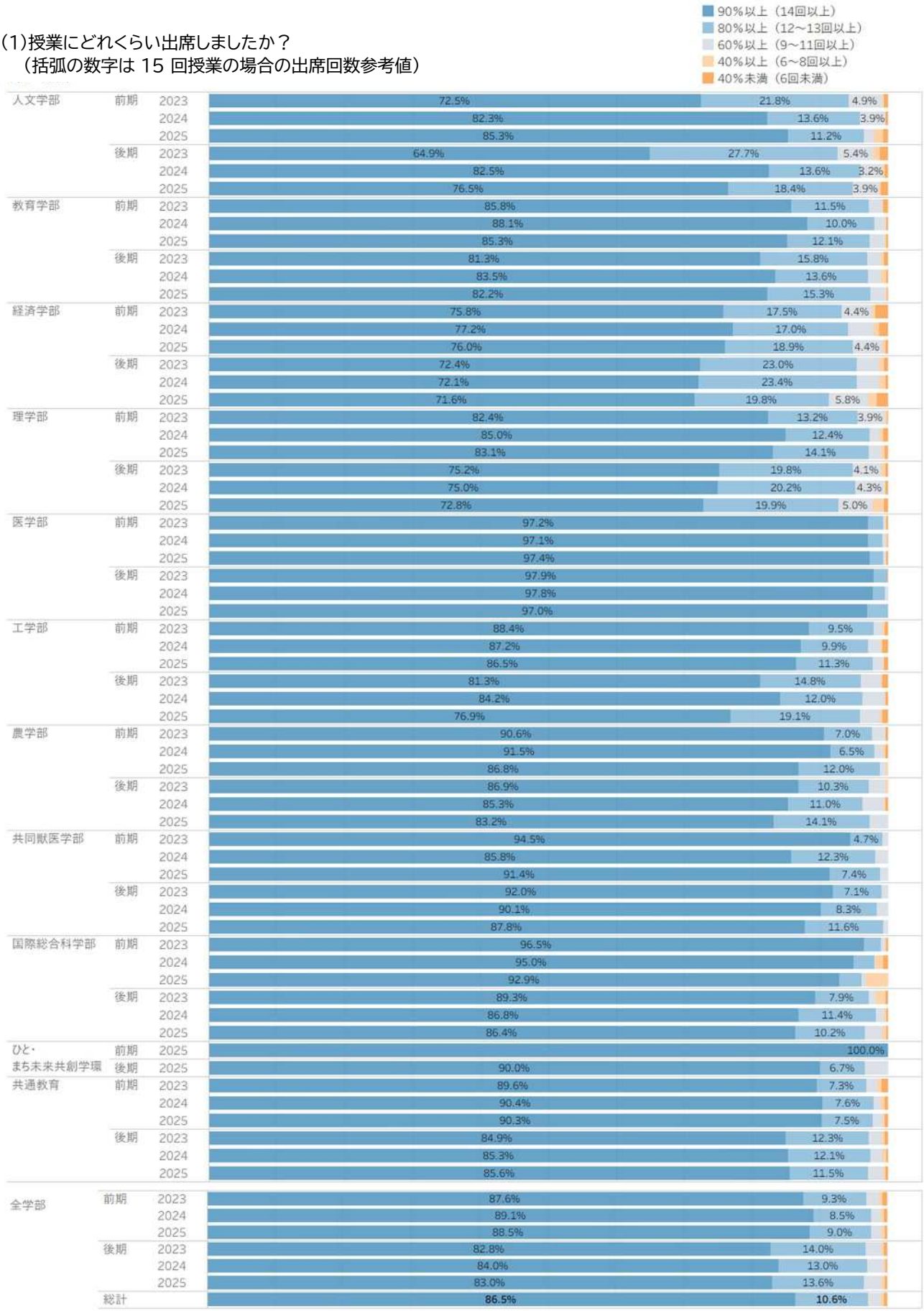
Q9　この授業に関する感想や要望等があれば、具体的に記述してください。

（　　）

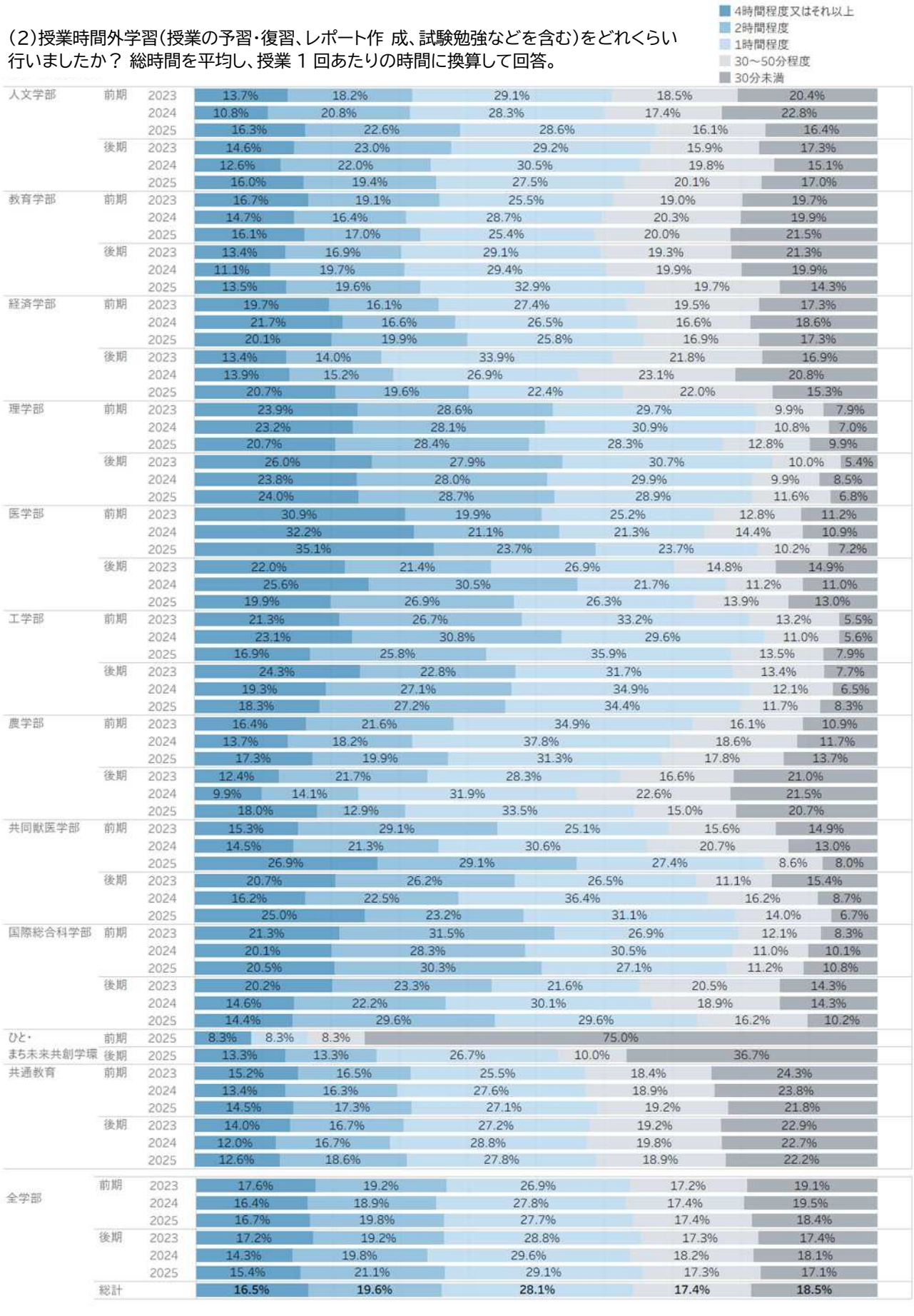
【教員授業自己評価】

山口大学修学支援システムにて実施している。学生授業評価のフィードバックと合わせて教員が自ら授業の振り返りを行い、科目の改善、また各学部の FD やカリキュラム改善等に活用されている。

(1)授業にどれくらい出席しましたか？
（括弧の数字は 15 回授業の場合の出席回数参考値）

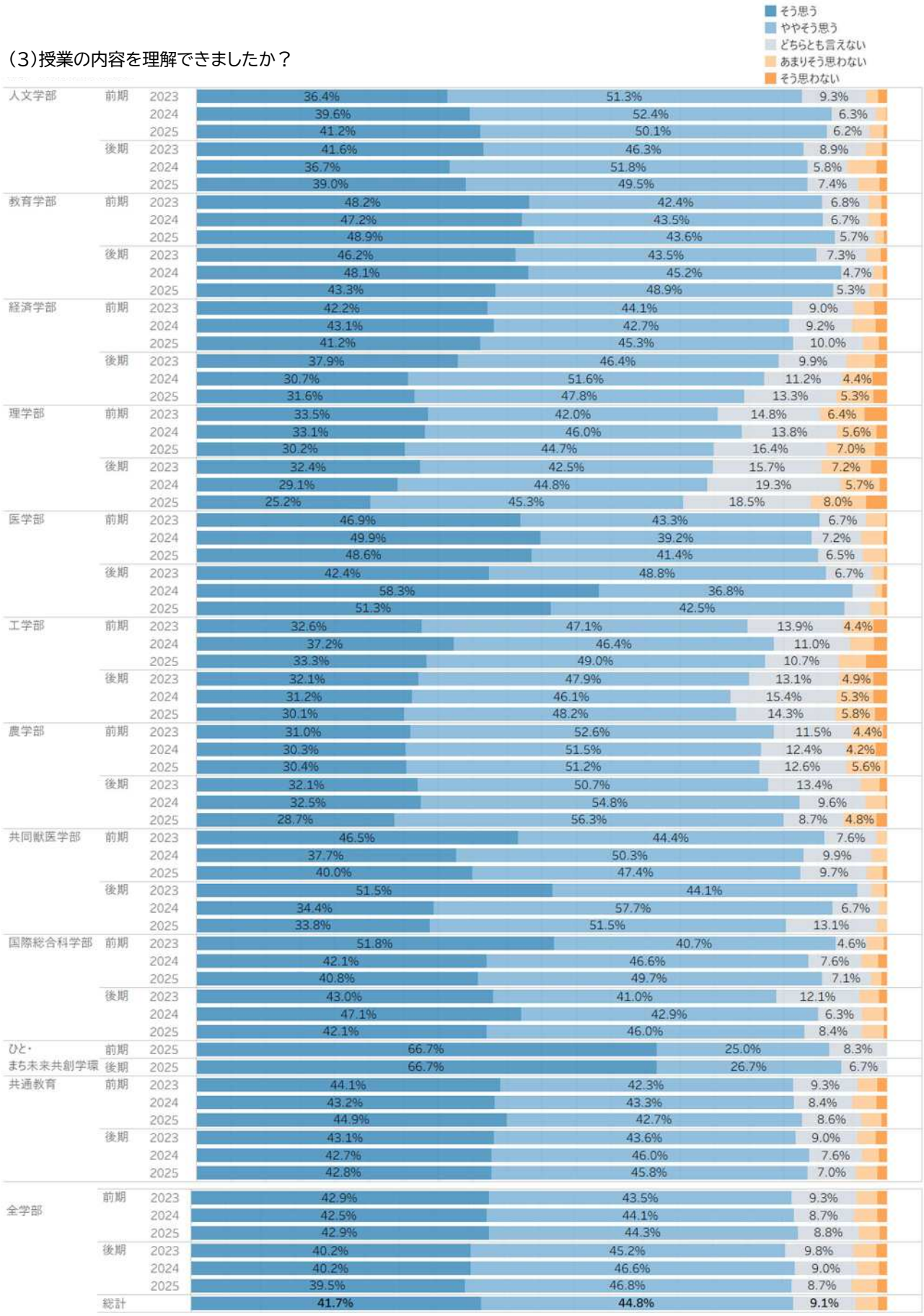


(2)授業時間外学習(授業の予習・復習、レポート作 成、試験勉強などを含む)をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業 1 回あたりの時間に換算して回答。

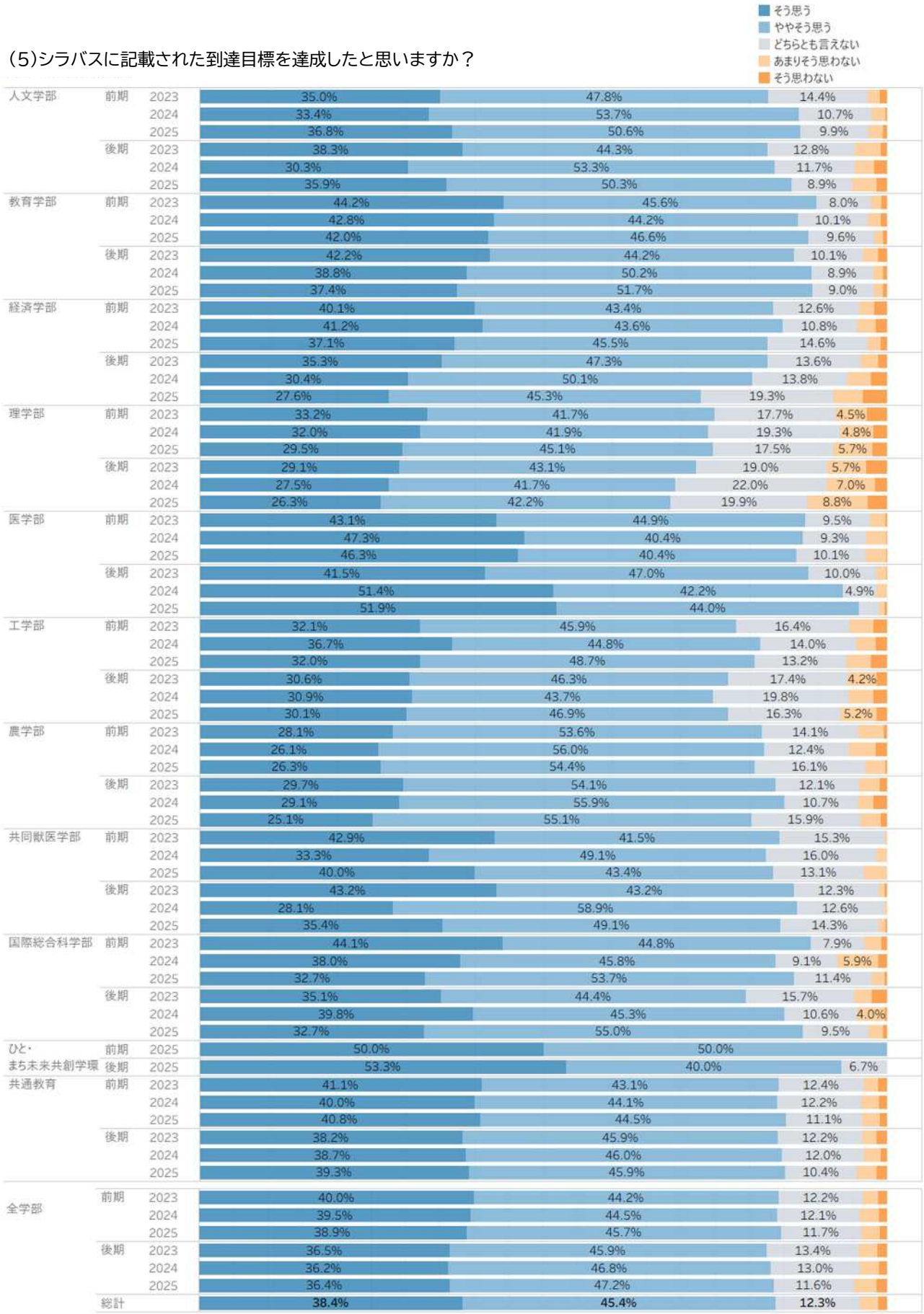


			4時間程度又はそれ以上	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満
人文学部	前期	2023	13.7%	18.2%	29.1%	18.5%	20.4%
		2024	10.8%	20.8%	28.3%	17.4%	22.8%
		2025	16.3%	22.6%	28.6%	16.1%	16.4%
	後期	2023	14.6%	23.0%	29.2%	15.9%	17.3%
		2024	12.6%	22.0%	30.5%	19.8%	15.1%
		2025	16.0%	19.4%	27.5%	20.1%	17.0%
教育学部	前期	2023	16.7%	19.1%	25.5%	19.0%	19.7%
		2024	14.7%	16.4%	28.7%	20.3%	19.9%
		2025	16.1%	17.0%	25.4%	20.0%	21.5%
	後期	2023	13.4%	16.9%	29.1%	19.3%	21.3%
		2024	11.1%	19.7%	29.4%	19.9%	19.9%
		2025	13.5%	19.6%	32.9%	19.7%	14.3%
経済学部	前期	2023	19.7%	16.1%	27.4%	19.5%	17.3%
		2024	21.7%	16.6%	26.5%	16.6%	18.6%
		2025	20.1%	19.9%	25.8%	16.9%	17.3%
	後期	2023	13.4%	14.0%	33.9%	21.8%	16.9%
		2024	13.9%	15.2%	26.9%	23.1%	20.8%
		2025	20.7%	19.6%	22.4%	22.0%	15.3%
理学部	前期	2023	23.9%	28.6%	29.7%	9.9%	7.9%
		2024	23.2%	28.1%	30.9%	10.8%	7.0%
		2025	20.7%	28.4%	28.3%	12.8%	9.9%
	後期	2023	26.0%	27.9%	30.7%	10.0%	5.4%
		2024	23.8%	28.0%	29.9%	9.9%	8.5%
		2025	24.0%	28.7%	28.9%	11.6%	6.8%
医学部	前期	2023	30.9%	19.9%	25.2%	12.8%	11.2%
		2024	32.2%	21.1%	21.3%	14.4%	10.9%
		2025	35.1%	23.7%	23.7%	10.2%	7.2%
	後期	2023	22.0%	21.4%	26.9%	14.8%	14.9%
		2024	25.6%	30.5%	21.7%	11.2%	11.0%
		2025	19.9%	26.9%	26.3%	13.9%	13.0%
工学部	前期	2023	21.3%	26.7%	33.2%	13.2%	5.5%
		2024	23.1%	30.8%	29.6%	11.0%	5.6%
		2025	16.9%	25.8%	35.9%	13.5%	7.9%
	後期	2023	24.3%	22.8%	31.7%	13.4%	7.7%
		2024	19.3%	27.1%	34.9%	12.1%	6.5%
		2025	18.3%	27.2%	34.4%	11.7%	8.3%
農学部	前期	2023	16.4%	21.6%	34.9%	16.1%	10.9%
		2024	13.7%	18.2%	37.8%	18.6%	11.7%
		2025	17.3%	19.9%	31.3%	17.8%	13.7%
	後期	2023	12.4%	21.7%	28.3%	16.6%	21.0%
		2024	9.9%	14.1%	31.9%	22.6%	21.5%
		2025	18.0%	12.9%	33.5%	15.0%	20.7%
共同獣医学部	前期	2023	15.3%	29.1%	25.1%	15.6%	14.9%
		2024	14.5%	21.3%	30.6%	20.7%	13.0%
		2025	26.9%	29.1%	27.4%	8.6%	8.0%
	後期	2023	20.7%	26.2%	26.5%	11.1%	15.4%
		2024	16.2%	22.5%	36.4%	16.2%	8.7%
		2025	25.0%	23.2%	31.1%	14.0%	6.7%
国際総合科学部	前期	2023	21.3%	31.5%	26.9%	12.1%	8.3%
		2024	20.1%	28.3%	30.5%	11.0%	10.1%
		2025	20.5%	30.3%	27.1%	11.2%	10.8%
	後期	2023	20.2%	23.3%	21.6%	20.5%	14.3%
		2024	14.6%	22.2%	30.1%	18.9%	14.3%
		2025	14.4%	29.6%	29.6%	16.2%	10.2%
ひと・まち未来共創学環	前期	2025	8.3%	8.3%	8.3%	75.0%	
	後期	2025	13.3%	13.3%	26.7%	10.0%	36.7%
共通教育	前期	2023	15.2%	16.5%	25.5%	18.4%	24.3%
		2024	13.4%	16.3%	27.6%	18.9%	23.8%
		2025	14.5%	17.3%	27.1%	19.2%	21.8%
	後期	2023	14.0%	16.7%	27.2%	19.2%	22.9%
		2024	12.0%	16.7%	28.8%	19.8%	22.7%
		2025	12.6%	18.6%	27.8%	18.9%	22.2%
全学部	前期	2023	17.6%	19.2%	26.9%	17.2%	19.1%
		2024	16.4%	18.9%	27.8%	17.4%	19.5%
		2025	16.7%	19.8%	27.7%	17.4%	18.4%
	後期	2023	17.2%	19.2%	28.8%	17.3%	17.4%
		2024	14.3%	19.8%	29.6%	18.2%	18.1%
		2025	15.4%	21.1%	29.1%	17.3%	17.1%
	総計		**16.5%**	**19.6%**	**28.1%**	**17.4%**	**18.5%**

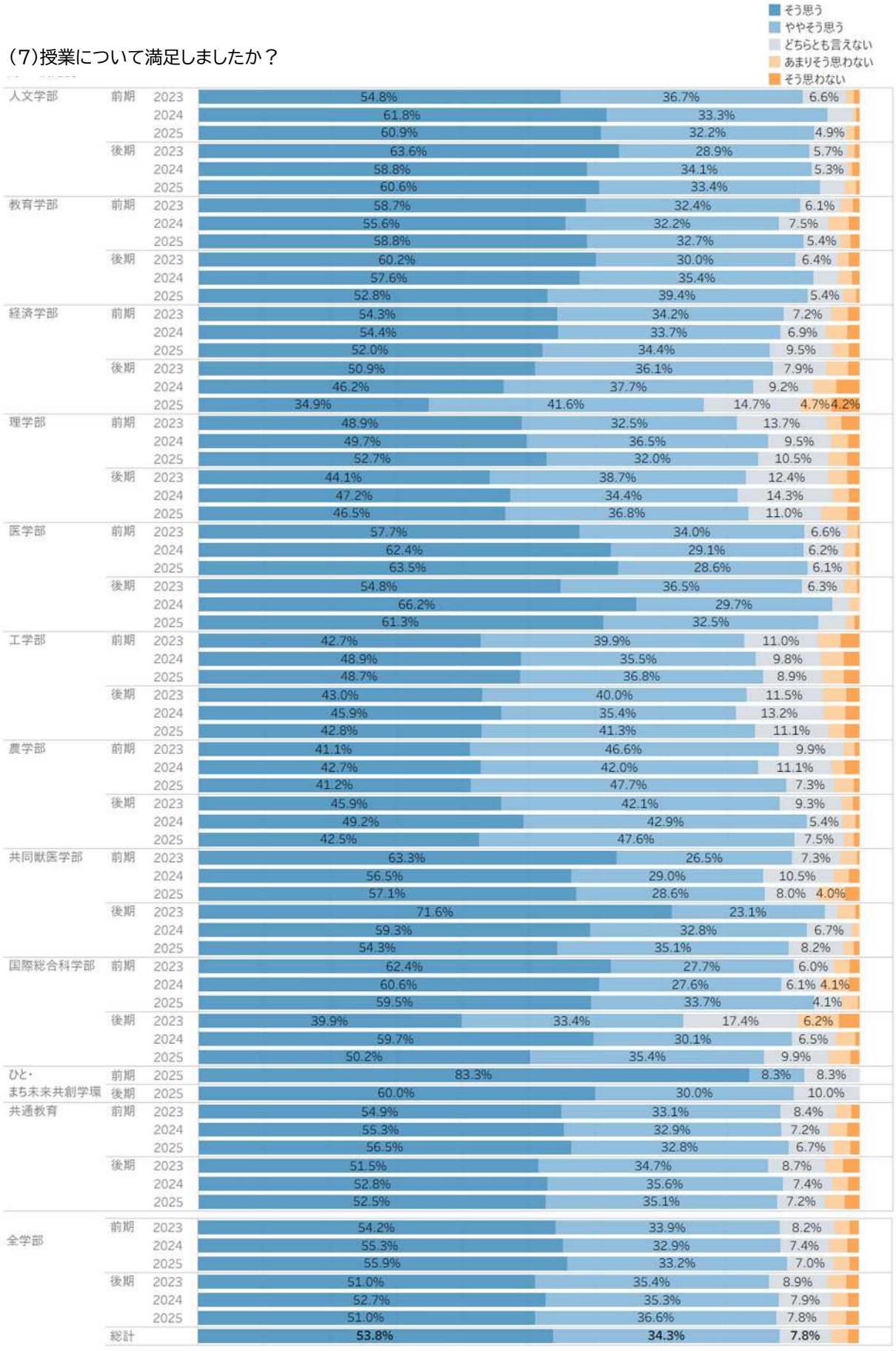
(3)授業の内容を理解できましたか？



(5)シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？



(7)授業について満足しましたか？



Ⅱ．学部・研究科の FD

＜1．人文学部の FD＞

（1）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2025 年 10 月 25 日	**開催場所**	共通教育 1 番教室
テーマ	人文ムセイオン 2025　「祈り」		
講師	人文学部（真木隆行、谷部真吾、稲垣健太郎、野坂昭雄）	**参加者**	教職員 20 名以上、学生 400 名以上

研修内容

2025 年度も昨年度と同様に、人文学部主催の講師派遣型 FD 研修会、および FD の名を冠した研修会は行わなかった。その背景に、近年研究・教育活動そのものよりも、それに付随する諸業務が増えているという事情がある。そのため各教員の研究・教育に関するリソースを確保すべく、 FD の名を冠する学部主催の活動は行わなかった。ただその代替として、FD 活動に準ずるものとして 2023 年度から始まった「人文ムセイオン」への参加を FD としても呼びかけた。これは公開ピアレビューと同等の意義があり FD 活動の観点からも有益な機会となっている。

人文ムセイオンは、人文学部の教職員の多くが参加し、かつ人文学部に所属する学生（1 年～4 年）の半数以上が出席するという大規模なものである。2025 年 10 月 25 日（土） 8 時 50 分～16 時 10 分にわたり、人文学部の異なる分野の教員 4 人（真木隆行、谷部真吾、稲垣健太郎、野坂昭雄）が異なる視点から「祈り」を共通テーマに講義を行い、学生とディスカッションを行った。また理学部より 2 人の教員（山中明、野﨑隆之）をゲストコメンテーターとしてお招きし、学部間交流を行った。

人文ムセイオン後に FD 部会から簡単なアンケートを行ったが、のべ 82 人が講義を聴講したことが明らかとなった。これはピアレビュー82 回分相当の効果があったのではないかと思われる。



（２）教育改善

＜活動内容：人文学部＞

教育改善のためのピアレヴュー

人文学部の教員の中からレビュアー教員 5 名を選出して実施している。(平成 30 年度より）レビュアー教員は参観する授業を任意に選択し、授業担当教員に依頼して参観する形式をとっている。2025 年度に参観を担当した 4 名の教員からは、いずれも詳細なレポートが作成された（1 名の教員に関しては次年度の担当となった)。教員ピアレビューにおいては、「授業進行における時間配分や、受講者の積極的な発言をうながす工夫と議論の展開方法など、学ぶところの大変多い授業だった」、あるいは「今後は、自身の授業においても言語学の立場からこの領域の議論を展開することで、学生が人文学部内で分野横断的に一つのテーマを考察する機会を提供できるのではないかと考えるに至り、本ピアレビューは大変貴重な示唆を与えてくれるものであった」という意見が寄せられており、自身の教育活動を顧みる契機として非常に有益であったと思われる。

前期共通科目「基礎セミナー」の運営

人文学部 FD 部会では例年「基礎セミナー」の統括運営を担当し、初年次教育に関わる授業担当教員を支援している。そのために前年度 3 月に担当教員・教務関係者・学務係の連携で打ち合わせのための研修を行った。授業を担当する教員が円滑に授業実施できるような取り組みとして、授業担当者に各回の授業内容・問題点・改善点等に関する話し合いが行われた。

基礎セミナーの授業では、キャリア形成や留学案内も組み込まれており、こうした授業を担当していただくよう講師に依頼し、円滑な授業運営に努めた。2023 年度より「基礎セミナー」の最終回は、学部長による人文ムセイオンの紹介になっている。次年度も「人文ムセイオン 2026」を開催する予定であり、これは FDという観点からも非常に重要な機会となっている。

学生授業評価・教員授業自己評価

令和 7 年度（前期）の「学生授業自己評価」では、85%の学生が 90%以上出席し、また授業内容に関しても 9 割以上の学生が「理解できているか？」という問いに対し、「そう思う」「ややそう思う」と回答している。他方で、令和 7 年度（後期）になると 90%以上出席した学生が 77%と下がり、「理解できているか？」という問いに対し、「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生が 89%と微減していた。これは前期から後期にかけて授業の難易度が上がることと、学生生活における不適応によるものも関係していると思われ、改善する余地を残す部分となっている。また授業時間以外の学習に関しても、 2 時間以上と答えた学生が前期は 52%だったのに対し、後期は 47%と微減している。

教員授業自己評価に関しては、概ね学生は授業内容を理解していると判断しており、それは授業内で課したレポートや期末テストから判断していることが窺われた。ただ一部で授業内容が適切に伝えられていないという反応も寄せられていた。それらは、「関心に幅があり、取り組みの仕方が不充分とみられる学生も散見されたので」という回答などからうかがえる。いずれの場合においても、コメントペーパー、授業内発表、中間・期末試験、レポートなどが、学生と教員との重要なコミュニケーションの場となっており、学生・教員にとっては多少負担になることもあるが、定期的に細やかなコミュニケーションをとっていくことの必要性がみられた。

＜２．教育学部の FD〉

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2025 年 7 月 16 日（水） 14:40～15:10	**開催場所**	教育学部 21 番教室
テーマ	Google サービスの使い方：Google AI サービスの活用を含めて		
講師	新田拓也　氏 （グーグル合同会社，山口大学客員准教授）	**参加者**	61 名（特命 3 名を含む）

研修内容

本研修では，Gmail と Google カレンダー，Google ドライブの便利だけどあまり知られていない使い方，Google の生成 AI チャット「Gemini アプリ」と AI ノーツルールの「NotebookLM」のそれぞれの使い方，学校現場等での実践事例などについて資料をもとに説明と実演がなされた。また，参加者も実際に「Gemini アプリ」と「NotebookLM」を操作し，体験しながら，理解を深めた。

開催日時	2025 年 9 月 17 日（水） 14:40～15:10	**開催場所**	教育学部 21 番教室
テーマ	教育学部の戦略的外部資金の獲得に向けて		
講師	義嶋諒也氏（産学公連携・研究推進センター　URA 室），末益亮太氏（産学連携課研究契約係長）	**参加者**	61 名（特命 3 名を含む）

研修内容

本研修では，義嶋氏から①外部資金獲得の必要性，②モデル事例紹介，末益氏から③産学連携制度紹介の 3 点について行われた。

外部資金獲得の必要性について，国立大学の法律上の役割，国立大学の新しい役割，運営費交付金の減額，国立大学法人の分類，外部資金獲得を支援する URA 室の機能について説明がなされた。

次に，モデル事例紹介として，本学部の原田拓馬講師が代表研究者となっている「HR 系企業との連携によるライフデザイン教育プログラムの開発研究をとりあげて，説明がなされた。

最後に，産学連携課研究契約係が担当している「共同研究」「受託研究」「学術指導」と各学部の予算管理係が担当している「受託授業」についての概要の説明がなされた。

開催日時	2025 年 10 月 15 日（水） 14:40～15:10	**開催場所**	教育学部 21 番教室
テーマ	教学 IR 活用のための各種調査（在学生・卒業時・卒業生等）の報告について		
講師	藤本正巳氏（教育・学生支援機構 教学マネジメント室講師）	**参加者**	68 名（特命 6 名を含む）

研修内容

本研修では，今回の FD の目的（学生対象のアンケート調査から得れた情報をもとに，現在行われている教育の現状と課題の把握に繋がるきっかけを作ること），授業評価アンケート（2022 年度から 2024 年度の到達目標の達成，授業外学習の時間），在学生調査（2022 年から 2024 年度の学部・研究科のディプロマポリシーの認知度），卒業時・修了時調査（2022 年度から 2024 年度の学部・研究科における教育の満足度）のそれぞれの結果について，資料をもとに説明がなされた。

最後に，教学マネジメント室の HP に在学生調査をはじめ，各種調査結果を教学 IR データとして掲載していること，それらの結果をふまえて，学部・研究科の教育活動を考える際には活用してほしいとの要望がなされた。

（２）教育改善

＜活動内容：学生授業評価・教員授業自己評価＞

・概要

学生授業評価・教員授業自己評価を行い、その分析を行った。

・結果

授業評価の実施率は次の結果となった。

学生授業評価		対象時間割数	実施時間割数	実施率
	教育学部	451	361	80.0%
	教育学研究科	33	18	54.5%

教員授業評価		対象時間割数	実施時間割数	実施率
	教育学部	449	380	84.6%
	教育学研究科	102	86	84.3%

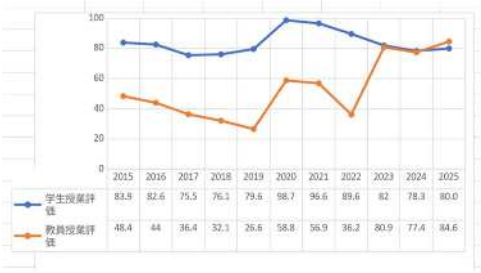
授業時間外学習の結果は次のようになった。

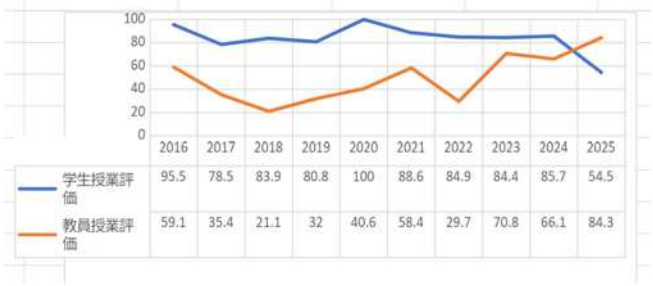
	3時間程度又はそれ以	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満	計
教育学部	386	471	740	513	475	2585
教育学研究科	14	27	14	6	2	63

	3時間程度又はそれ以	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満
教育学部	14.9%	18.2%	28.6%	19.8%	18.4%
教育学研究科	22.2%	42.9%	22.2%	9.5%	3.2%

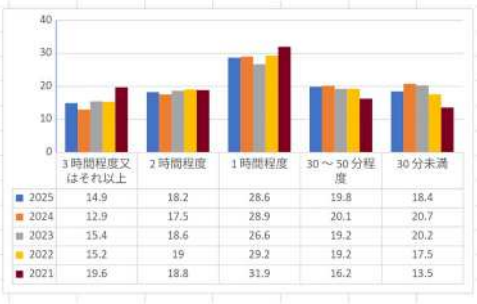
・課題や改善活動

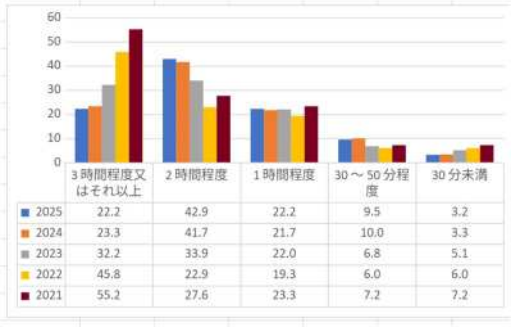
授業評価の実施率の経年変化を下に示す（左が学部授業、右が大学院授業）。教員の授業評価率が上昇していることがうかがえる。





授業時間外学習の経年変化を下に示す（左が学部授業、右が大学院授業）。





概ね、例年通りであるが、大学院授業に於いて授業時間外学習が増加していることがうかがえる。

＜3．経済学部の FD＞

（1）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2026 年 3 月 4 日(水)	**開催場所**	経済学部第一会議室
テーマ	シラバスから考える教育改善		
講師	岩野摩耶(本学教学マネジメント室)	**参加者**	40 名

研修内容

本 FD は、シラバスと関連する答申や指針、活用できる学内データについて説明をしてもらい、よりよい教育の在り方や今後に向けた取り組みを考えるきっかけを作ることを目的としている。

本 FD 後、参加教員から以下のような感想をもらった。

・成績評価方法の部分には，出席点利用できない点は参考になりました。
・シラバスの位置づけや重要性が再確認できた。
・シラバスの記載事項に関する留意点について再確認することができ有意義であった。
・評価の仕方を具体的に示すことや書いてはいけないことなどがわかりやすく教えてもらえたことはありがたかった。
・評価基準を学生にきちんと明確にしなければならないという点は参考になりました。
・シラバス執筆に関する大学本部の要求内容を説明に終始しており、授業改善の参考にはならなかった。
・大学院のシラバスにおける記述の方法に関する注意事項が参考になりました。
・シラバスの記載内容の趣旨・目的の理解が進んだ。
・出席や欠格条件の扱いを明確にしてほしい。

また、現行の山口大学のシラバス自体についての意見も得た。

・他所の大学のシラバスに比べて記載事項が多い割には、学生さんにとっては要点が判り難いと思われる。例えば、毎回の授業の枠組みを機械的に書くのはよろしくない。
・イギリスの大学のシラバスはもっとシンプルで分かりやすいものとなっています。細かく書くことが目的となっていて結果的に学生には分かりにくいものとなっている点があるのではないかと思われます。
・入力項目を半分以下にして学生が参考にしやすい形にしてください。大学側の都合で項目が建て増し構造で増え続けた結果、誰のためのシラバスなのか分かりにくくなっています。
・近年シラバスに関して様々な改善が要求されていますが、教員への周知が不十分だと思います。
・不要な項目が多い。例えば、SDGs の項目、アクティブラーニングポイントなど参考にして履修登録する学生はいない（断言できる）。
・html（スマホ対応）にすべき。

（２）教育改善

＜活動内容：経済学部及び大学院懇談会＞

開催日時: 2026 年 2 月 9 日(月)

開催場所: 経済学部第一会議室

参加者: 16 名

懇談会の内容:

山口大学経済学部及び大学院人間社会科学研究科経済学・経営学専攻に、教育、管理運営等に対し、多様なステークホルダーの意見を求める組織として、山口大学経済学部及び大学院人間社会科学研究科経済学・経営学専攻懇親会(以下、懇親会という)を置いている。懇親会は、本学部の教育、管理運営等の質的向上及び組織の活性化等に資する事項や、射会から求められる人材の養成に関する事項等に関する検討及び提言を行うことを目的としている。

今年度の懇親会は、令和 8 年 2 月 9 日(月)の 14 時から経済学部第一会議室で開催された。出席者は学部長をはじめ本学部職員(7 名)のほか、本学部生 3 名、大学院生 1 名、さらに学部長が委嘱する者として、山口県立防府商工高等学校校長、山口県立下松高等学校校長、山口県商工会議所連合会常任理事、山口県中小企業団体中央会専務理事、一般社団法人鳳陽会常務理事が参加した。本学部の新しい取り組みや、N-E.X.T.(ネクスト)ハイスクール構想等についての意見交換が行われた。

＜４．理学部の FD＞

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和８年１月１４日（水）	**開催場所**	理学部１４番講義室
テーマ	大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状		
講師	春日由美 （山口大学学生相談所長　教授）	**参加者**	５３名

研修内容

当該研修会は，学生相談の現状から見えてくる大学生・大学院生の抱えやすい課題を理解・把握し，支援を必要とする学生に適切な対応ができるよう知識と手段を学ぶことを目的として開催された。

学生相談所長の春日教授を講師に迎え，理学部教員の約８割にあたる５３名が参加した。

研修会の概要は以下の通りである。

１．学生相談とは？
２．学年毎の抱えやすい課題・危機
３．山口大学の学生支援
４．学生の命を守るために
５．危機場面での留意点
６．学生相談所から先生方へのお願い

上記項目について解説を受けるとともに，理学部の教員としてとるべき対応や対処法について深く考える機会を共有・享受した。

研修会の最後に，講演内容について質疑応答が行われた。複数の質問が出た他，講師を交えて学生支援の方法について活発な意見交換が行われた。

研修会の受講により，各教員の学生支援に対する意識が改革され，また対応手段等も最新のデータへとアップデートされた。今後の学生指導に有益な研修会であった。

（２）教育改善

＜活動内容：授業公開（ピアレビュー）（数理科学科）＞

(1) 授業名「線形代数学基礎 II」

１）概要

① 実施日時:令和 7 年 12 月 18 日(木)8:50 - 10:20

② 対象学生:数理科学科 1 年生

③ 授業概要:有限次元ベクトル空間における基底変換、線形写像の表現行列の変換についての講義と演習を実施した。

④ 授業担当教員: 平川 義之輔

⑤ レビュアー: 菊政、倉富、幡谷、南出、山﨑、塚本、寺本、小杉、脇條

２）レビュー結果

- 復習、新規内容、振り返りという進行が理解向上に働くと感じた。
- 授業途中に演習時間や理解度確認テストの時間を確保するなど、学生が授業に主体的に取り組む工夫が施されていた。
- 課題返却の際、個別に声かけをする姿は、学習意欲を高める行為であると評価できる。

(2) 授業名「幾何学特論 III」

１）概要

- 実施日時:令和 8 年 1 月 7 日(水)14:40 - 16:10
- 対象学生:数理科学科 4 年生、大学院修士 1、2 年生
- 授業概要:可微分関数の特異点論の平面曲線への応用についての講義を行った。
- 授業担当教員: 寺本 圭佑
- レビュアー:宮澤、山﨑、平川、脇條

２）レビュー結果

- 板書は文字が大きく見やすく、内容も整理された記述で、理解しやすい構成であった。
- 定義や証明の解説では，数学的な厳密さを担保しつつも適宜図を盛り込み、直感的な理解がしやすい工夫がなされていた。
- 学生の反応を確認し質問を投げかけるなど、双方向性を意識した授業が行われていた。

(3) 授業名「解析学特論 IV」

１）概要

① 実施日時:令和 8 年 1 月 8 日(木)16:20 - 17:50

② 対象学生:数理科学科 4 年生、創成科学研究科博士前期課程

③ 授業概要:ベクトル値の微分・積分と Banach 空間上の 1 階常微分方程式の解説を行った。

④ 授業担当教員: 山﨑 陽平

⑤ レビュアー: 寺本、平川、小杉

２）レビュー結果

- 命題の証明を問いに出すことで、学生が考える機会を与えており、よい試みであると感じた。
- 複雑な条件を「」で囲むなど、注目すべき点が一目でわかるような工夫がなされていた。

＜活動内容：授業公開（ピアレビュー）（物理・情報科学科情報科学コース）＞

授業名「シミュレーション技法」

１）概要

① 実施日時：2025 年 5 月 20 日（火）13:00～14:30

② 対象学生：物理・情報科学科情報科学コース 3 年次配当科目

③ 授業概要：数値計算法による高階連立微分方程式の解法を板書にて授業し，それに関する例題を演習形式で実施していた．この授業は 7・8 時限開講の「マルチメディア処理演習」と連動しており，計算機による演習はそちらで実施している．

④ 授業担当教員：浦上直人

⑤ レビュアー：西井淳，末竹規哲，川村正樹，野﨑隆之，上田仁彦，小林泰良

⑥ レビューの方法：授業の様子をレビュアーが観察し，授業担当者へコメントを返した．その後，授業担当者はそれらのコメントや質問に対して，回答をした．

２）レビュー結果

授業の優れている点と気になった点を授業後に授業担当者にフィードバックした．以下はその抜粋である．

- 全体に亘って学生に親身な態度で授業をしていた．特に，学生の反応や挙手の状況をみて適切に講義のペースを変更し，復習すべき箇所を明示的に言及していた．
- 授業の要点を，前回までの授業での内容とのアナロジーで説明をしていた．このようにすることで，前回までの復習と新規の問題を解くときの着想の得方を体得できるようになっており，良い方式であると思った．
- 美しい実装の仕方や高速化のコツなど専門家ならではの視点が授業中に説明されており，大変良かった．
- 授業の速度や難易度は問題なく，学生もまじめにノートをとり，授業に取り組んでいた
- 授業中に演習をはさみ，教員が自ら解けているかを見て回ることで，理解度を測っていた
- １つのテーマを１コマで解説しており、授業の構成はよいと思う。
- 講義が板書形式で丁寧に行われ、学生はノートをとることになるため、理解の定着の助けになると感じた
- 講義の進み方は学年平均レベルの学生にとってちょうど良いものに感じた
- 講義時間の途中に学生に演習問題を解かせるのは学生の集中力を持続させるのに効果的だと感じた
- 宿題に対する解説も e-learning 中で行われており，非常に効率的であると思う
- 学生の理解力（能力）を考慮しながら、丁寧に授業が進められており、非常によかった。自分の授業の進め方に関して、非常に参考になった。
- 授業中、適度な手計算が含まれており、学生が考えながら授業に取り組むことができていたように思う。
- 板書の字もきれいで、見易かった。字の大きさも丁度よかった。

＜活動内容：授業公開（ピアレビュー）　（化学科）＞

授業名「有機化学実験」

1）概要

① 日時･場所：2025 年 5 月 30 日(金) 13:00～16:00 理学部本館 3 階　化学第 2 実験室 (323 室)

② 対象学生：化学科　化学コース 2 年生（必修科目：40 名）

③ 授業概要：「有機化学実験」は、化学科 2 年生の専門・必修科目である。学問としての化学を構成している主要素のひとつである有機化学に関して、基礎的な実験操作ならびに知識を身につける。今回は、医薬品(sildenafil, 販売名 viagra)を合成するために確立された 5 工程の合成プロセスのうち、前半の 4 工程からなる多段階合成を再現する。本ピアレビューでは、このうちの第 1 変換反応を行う。

④ 授業担当教員　上條真

⑤ レビュアー　藤井寛之,村藤俊宏,川俣純, 綱島亮,上條真,TA 学生 2 名

⑥ レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点について意見を交換し、授業内容や進め方の改善に役立てる。

2）レビュー結果

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 講義内容に関して
   - 将来、研究室における実験に必要なスキルを身に付けることができる良い内容である。
   - 先進的な内容で、向学心の高い学生には良い実験内容である。
   - 状況を見て、補足解説や理解不足の指摘など、実験内容の理解を促す工夫がある。
   - 授業 1 回当たりの実験量が多くないため、時間に余裕があり、詳細に指導できている。
   - 実際に製薬企業で行われている医薬品の多段階合成の一部を体験できる点が良い。
2. 授業の進め方に関して
   - 実験直前に、実験操作の補足や想定される失敗を回避するための十分な説明があった。
   - 意欲に欠ける学生が勉強する工夫があると教育効果があがる。
   - 実験のポイントをプロジェクター映写するなど、効率的な授業運営がされている。
   - 課題の解説資料が moodle にアップされ、各自で学習できるように工夫されている。
3. その他、改善点やよかった点など
   - 実験に関する説明中は静寂な環境が保たれており、学生も実験に集中できていた。
   - 白衣は全員着用していたが、保護メガネや手袋は未装着の学生がいた。直接操作していないため着用していない可能性もあるが、より一層の着用徹底があると良い。
   - 予習時に反応機構を書かせてから実験を始めた方が、その実験の危険性などへの理解が深まるように思う。実験の初日までに、反応機構を考えさせる課題を課すのが良い。
   - 予習前提で進めている講義なので、実験操作や当量などに関してはきちんと予習できているが、副反応や、反応停止の操作の意味が分からず実験をしている学生が見受けられる。実験前に確認できると良い。
   - 実験操作(例えば TLC 分析)などのやり方の理解が不十分な学生が多く見受けられたので、もう一度説明をした方が良い。

＜活動内容：授業公開（ピアレビュー）　（生物学科）＞

授業名「生物学セミナー」

１）概要

① 日時：令和７年１２月２３日（火）５・６時限　理学部１５番教室

② 対象学生：生物学科１年生（３９名）

③ 授業の概要：生物学セミナーでは初回の講義で、シラバスに従って 15 回の講義内容や授業方針について説明をし、授業の到達目標を伝えている。また、生物学の考え方、捉え方を概説し、2 回目以降の授業を受ける準備を行っている。１２月２３日の授業では、動物胚の細胞数の制御機構と実験方法について解説した。

④ 授業担当教員：上野秀一

⑤ レビュアー：武宮淳史，小島　渉（生物学科）

⑥ レビューの方法：９０分の講義を聞いていただき、終了後、指導方法について改善点などを文書で指摘して頂く。

２）レビュー結果

・ 前回の講義内容の振り返りから入る工夫がなされており、それにより唐突にならず、授業に入りやすい工夫がなされていた。

・ 高校生物で学ぶ関連テーマが丁寧に紹介され、講義内容を理解する上での基礎知識を確認する工夫がなされていた。これにより講義内容の理解度が向上する効果が期待される。

・ 細胞分裂に伴う細胞小器官の動態や細胞死のメカニズムに関する講義であり、高校の教科書レベルの内容を踏まえつつ、バランスよく専門的な内容も盛り込まれ、1 年生の講義としては適切なレベルであった。細胞死の発見の歴史に関する説明もあり、学生を話しに引き込む工夫がよくなされていた。非専門家の視点からも、説明は全体的に大変分かりやすく感じた。

・ 縦長の教室であり、かつスクリーンの位置が低いため、後ろのほうの座席からはスライドの下部や細かい文字がやや読みづらいと感じることがあった。この教室での講義に関しては、オンラインか紙媒体で講義資料を配布するほうが良いかもしれない。

・

レビュアー２名の教員からの指摘を参考に、来年度以降の講義の改善に努めたい。

学生の理解度を確認するために、高校を含めたこれまでの知識を問いかけることで、自身の知識と講義の内容との関連性を理解してもらうことを心がけている。生物学セミナーは異なる教員が１～２回ずつ生物学のトピックを講義するため、受講者の興味を維持しやすい。一方、慣れてくると、興味のない生物学の話題は聞こうとしない学生が出てくるため、その対処が必要となる。授業では、主体的に自らが考える時間を作り、集中力を継続させる工夫を考えたい。今回の講義室においてスクリーンの位置によって内容が見えづらい旨の指摘があった。指摘にもある通り、講義室の広さや形状などの聴講環境に応じた配慮を次回以降の講義で行う必要がある。また理解不足や誤った答えをしてしまう学生への対応で、しばしば講義内容と大きく逸脱した内容の説明に時間をとられてしまうことがあった。適度な時間配分を心がける必要がある。学生の発言機会も少ないので、今後、さらに学生が授業に積極的に参加し、思考する意欲・学びを促進させたい。

＜活動内容：授業公開（ピアレビュー）　（地球圏システム科学科）＞

授業名「特別研究」

1）概要

① 実施日時：2026 年 2 月 12，13 日

② 対象学生：4 年生

③ 授業概要や授業の到達目標：地球科学専攻の各教員または教員グループの指導のもとに、各人の研究テーマに沿って野外調査や室内実験、文献講読などを行い、実験や調査、研究などに関わる専門性を高めると同時に、口頭発表や科学論文の作成を行う。各分野における研究を通して、専門性を高め、自ら考え、研究計画をデザインして責任をもって研究を進めることができること、十分にプレゼンテーションができること。地質学の基礎知識を体系的に理解し、自然の背景にあるメカニズムを洞察し、その情報を活用し、地球科学と社会の課題の解決につなぐことを目標とする。

④ 授業担当教員・レビュアー：地球圏システム科学科教員一同

⑤ レビューの方法：卒論発表会にて学生に授業アンケートを配布した。学習達成度、興味、発表のききとりやすさ、プロジェクターの字は読みやすさ、教え方（説明の仕方）はわかりやすさ、質問時間の長さ、質問に対する対応、私語等への注意、特別研究の利点と問題点、感想等の項目を設けた。また、参加教員には授業観察カードを配布し、主に発表技術、構成、理解度等、学生の参加度、野外教育あるいは室内実験における注意点などについてアンケート調査を実施した。

2）レビュー結果

授業アンケート、授業観察カードを集計後、2 月 17 日に授業研究会を実施し、当該授業の課題および改善策について認識を共有した。その結果を以下に集約する。

【学生からの意見】

- 他分野との意見交換の場がもっとあってよい。
- 他分野の発表を理解するのが難しい。

【教員からの意見】

- 学生の質問が少ない。
- 他分野の人からの質問を受ける練習をすると良い。
- 今年度の改善案に対して、他研究室間の往来，Moodle へのゼミ情報の掲示が低調であった。

【次年度実施する改善策】

- 来年度も特別研究でのピアレビューを継続することとする。
- 特別研究の発表会に 3 年生を前に座らせる、司会進行係を当該学年に任せる。
- 掲示板に談話会・ゼミ情報の一角を作る。
- 学生同士の自主ゼミをガイダンスで紹介する。
- 320 学生実習室の開放をアナウンスする。
- 談話会に学部生を招待する。運営の一部を学生に移管する。

＜活動内容：学生教員懇談会＞

・開催日時：令和７年７月１８日（金）１２：１０－１３：２０
・開催場所：人文・理学部管理棟４階大会議室
・参加者：理学部長，副学部長（教学委員長），副教学委員長，理学部事務長，学務係長，予算管理係長，学務係主任，各学科・コース代表３年生１名，４年生１名計１２名，大学院各専攻コース各１名計６名
・概要： 理学部学生・創成研究科（理学系）学生の要望・ニーズをもとに，学生と教員の共同による修学・生活環境の改善を図るため意見交換の場として学生と教員との懇談会を実施した。修学環境に関する学生からの意見に対し，学生・教員（学部）が立場を超えて，改善に向けて協議を行った。いくつかの案件については，改善策が決定され，その後，実施・実現がなされている。

＜５．医学部の FD＞

医学科

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2025 年 4 月 4 日（金） 17:00	開催場所	第１講義室、実習棟 A 2 階 チュートリアル室
テーマ	令和７年度　ＣＢＴブラッシュアップワークショップ		
講師	医学教育センター	参加者	44 名

研修内容

医学生が臨床実習前に必要な基礎医学知識や問題解決能力を評価する CBT においては、使用する問題を各大学で作成・ブラッシュアップし、医療系大学間共用試験実施評価機構に提出している。本学でも、教員の能力開発も含めて医療系大学間共用試験実施評価機構に提出する問題を各教員がグループ単位でブラッシュアップすることにより、内容（範囲・難易度・形式・表現）を整えている。

開催日時	2025 年 9 月 9 日（火） 17:00	開催場所	Web 開催
テーマ	新任教職員オリエンテーション　～医学教育の概要～		
講師	医学教育センター	参加者	22 名

研修内容

新任教職員を対象として，医学教育の現状と課題，国家試験の現状について基本的な解説がなされた。その後，全国共通の課題として行われる医学生共用試験（CBT・Pre-OSCE，Post-CC OSCE）について，公的化された経緯及び制度の変更点について説明が行われた。また，本学における診療参加型臨床実習の構成やログブックを用いた学生による自己評価及び指導医評価の説明が行われ，医学教育への協力依頼があった。



図１　ＦＤ研修会ポスター



図２　Web 開催の様子

開催日時	2025 年 10 月 24 日（金） 18:00	開催場所	第 1 講義室
テーマ	プレ臨床実習テュートリアルテューター講習会		
講師	医学教育センター	参加者	11 名

研修内容

テューター未経験者を対象として，主に臨床実習入門ユニットの実施方法について，２時間程度の説明がなされた。

開催日時	2025 年 12 月 16 日（火） 17:00	開催場所	第 1 講義室
テーマ	令和８年度シラバス説明会		
講師	医学教育センター	参加者	45 名

研修内容

医学部医学科では，山口大学医学教育総合電子システム（eYUME: electronic system of Yamaguchi University Medical Education）を導入し，全ての授業内容を電子化したシラバスで公開し，卒前の医学教育内容に関する一大データベース兼学修リソースとして活用している。授業毎に身に付けるべき“学修目標”を設定し，eYUME に掲載するとともに，学生は，講義の都度，設定された“学修目標”をどの程度身に付けることができたかを自己評価している。授業担当教員は学生が評価した結果を閲覧することができ，講義や実習の向上に活用している。

FD 研修会では，改訂されたモデル・コア・カリキュラムへの対応を含めた次年度のシラバス更新に関する説明を行うとともに，学生の修学状況の確認やシステムの活用方法を確認し，意見交換を行った。



図１　説明会ポスター様

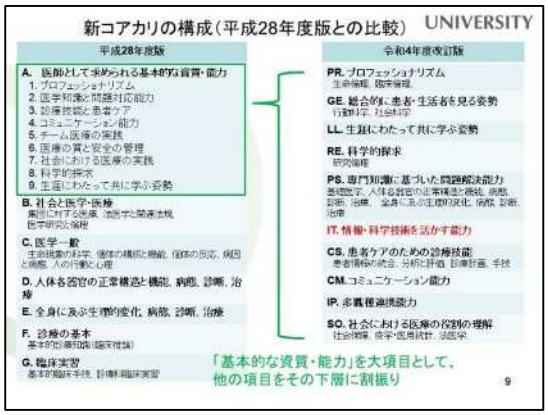


図２　資料の抜粋

（２）教育改善

＜活動内容：医学部医学科ＦＤ研修会及び医学部医学科教育プログラム評価委員会＞

○医学部医学科ＦＤ研修会
日時：令和７年 11 月 11 日（火）16 時～16 時 30 分
場所：オンライン

○第１回医学部医学科教育プログラム評価委員会
日時：令和７年９月 30 日（火）18 時 10 分～18 時 50 分
場所：Web 会議システム（GoogleMeet）

医学科において収集したデータに基づき，教育プログラムの効果及び適切性を評価する教育プログラム評価委員会を開催した。医師国家試験における成績比較， 地域医療実習を行った医学生のディプロマ・ポリシー修得状況，卒業生の初期臨床研修先，担任制の教員面談率について確認を行った。

委員会において，委員より下記の意見があった。
・強制力のない地域枠で入学した学生の県内定着率を高めるためには、地域医療を担う医師との面談機会を増やすなど、山口県の医療への理解と愛着を深める取り組みが有効ではないかとの意見が出された。
・低学年における不適切な態度への対応として、単に報告する制度だけでなく、担任面談などを通じて継続的に連携し、学生をサポートする体制が重要であるとの意見があった。これに対し、大学側から、この制度は学生への処罰を目的とするものではなく、あくまで教育的なサポートの一環として、評価とは切り離して慎重に運用していく方針であることが説明された。

また委員長から、来年６月に７年に一度の医学教育分野別評価を受審するにあたり、教職員および学生に対し、ヒアリングや実習見学等への協力依頼があった。

（報告事項）
報告 1 山口大学医学部医学科教育プログラム評価委員会規則について
報告 2 山口大学医学部医学科教育プログラム評価委員会委員について
報告 3 山口大学医学部医学科教育プログラム評価委員会の位置付けについて

（協議事項）
協議 1　第 119 回医師国家試験 合否別の各試験における成績比較（平均点±標準偏差）
協議 2　第 119 回医師国家試験　学内成績レポート
協議 3　第 119 回医師国家試験 問題別正答率全国比較

協議４　令和６年度及び令和７年度 地域医療実習を行った医学生のディプロマ・ポリシー（DP/卒業時の学修成果目標）修得状況
協議５　卒業生の初期臨床研修先について
協議６　担任制の教員面談率について

○第２回医学部医学科教育プログラム評価委員会
日時：令和８年３月１０日（火）18 時 10 分～18 時 50 分
場所：Web 会議システム（GoogleMeet）

医学科において収集したデータに基づき，教育プログラムの効果及び適切性を評価する教育プログラム評価委員会を開催した。共用試験における成績比較，ユニット別学修目標修得度，臨床実習の到達目標のオンライン自己評価の比較，医学教育センターで行ったアンケート（成績評価と担任制）及び全学で実施されたアンケート結果について確認を行った。

委員会において，委員より下記の意見があった。
・世界基準の医学部認証（認定）の継続は、学生の海外留学や将来のキャリア形成において重要な問題であり、学生自治会としてもアンケート回答率向上に向けて積極的に呼びかけ、協力したい。
・学習の効率化のため、試験の採点基準や出題論点（ポイントとなる分野）をより明確にしてほしい。過去問の配布を求めているのではなく、評価の観点や自己の到達度を知るためのフィードバックを要望する。
（上記２項目に対する回答）
→試験の質の担保として、異分野の教員間による「試験問題の相互チェック（教員間査読）」を導入している。また、平均点、最高・最低点に加え、マイナス１標準偏差（-1 SD）や解答の開示範囲を順次拡大し、評価の透明性を高める取組を推進する。

・Wi-Fi 環境の不備に対し、先行した吉田地区に続き、小串・常盤地区についても令和８年度以降に最新設備へ更新する計画がある。
・語学能力の課題に対し、広島大学を中心とした相互派遣等の臨床実習を通じ、ネイティブな医学英語に触れる機会を創出するなど、英語教育の実効性を強化していく。

（協議事項）
協議 1-1 山口大学と全国の CBT 得点率の年次推移
協議 1-2 共用試験 OSCE 山口大学と全国の評価点 推移
協議 2-1 ユニット別 GPCA の調査結果
協議 2-2 臨床実習の到達目標のオンライン自己評価集計　過去３年間（2023(令和 5)年度～2025(令和

7)年度）の比較

協議 3 医学教育センターアンケート結果 成績評価（総括的評価）と担任制(形成的評価)

協議 4-1　山口大学学修実態に関するアンケート（在学生調査）(2024 年度調査：学部生)

協議 4-2　山口大学卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケート（2025 年度調査）

保健学科

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2025 年 11 月 6 日 16：00～16：45	**開催場所**	保健学科研究棟・第二研究棟
テーマ	令和 7 年度保健学科防火教育・火災訓練		
講師	管理運営課施設管理係 有村 崇	**参加者**	59 名（学生・ 教職員・自 衛消防隊・防災センター・警備員など）

研修内容 令和 6 年度保健学科防火教育・火災訓練

●実施内容

保健学科において学部学生・院生・教職員を対象とした防火教育・訓練の自主訓練として、通常時（平 日の昼間）に保健学科研究棟 １階の男子トイレ付近から出火したという想定で、通報連絡・初期消火・ 避難誘導の訓練を実施した。

10 月 31 日：役割担当者を中心とした事前説明会を Web で実施した。

11 月 5 日：訓練当日

16:01 訓練火災発生（保健学科第二研究棟 1 階の感知器作動） 防災センターは、自動火災受信機を確認し放送する。 非常放送、避難開始

16:04 地区隊本部立ち上げ（研究棟）、地区隊本部へ出火通報

地区隊長より初期消火・応急救護所設置の指示

通報連絡班：防災センター・地区隊長に通報・連絡

避難誘導班：避難者の誘導・連絡等

応急・救護班：負傷者の応急手当、体調不良者の対応・状況報告

初期消火（消火器）開始 （第一発見者）初期消火班の到着

16:07 初期消火失敗、初期消火失敗の連絡（第一発見者）

地区隊長より避難誘導班長に避難指示、全員避難、研究棟玄関前（玄関ホール）に避難誘導

防火区画確保（発生場所の扉を閉める、避難経路の防火扉を閉める）

16:12 応急救護班による負傷者応急手当

16:15 避難完了者の点呼完了、避難完了報告

16:17 （館内放送）訓練火災鎮火、初期消火・避難訓練終了

16:30 水消火器の使い方訓練

自衛消防隊地区隊長（保健学科長）挨拶、防火防災管理者講評

16:45 訓練終了

サポーター 管理運営課施設管理係 有村 崇 、コーディネーター FD 委員 矢田・下川

アンケートでは、訓練内容の理解（90.5%）や有用性・防災知識の向上（いずれも 95.2%）については高評価であった。一方で、内容のわかりやすさは 81.0%にとどまり、役割担当の事前理解も 54.5%とやや低く、改善の余地が見られた。

開催日時	2026 年 1 月 7 日 16：00～16：30	**開催場所**	Web
テーマ	**医学部保健学科・ 医学系研究科保健学専攻 教育改善 FD**		
講師	教学マネジメント室 岩野 摩耶	**参加者**	49 名（保健学科教職員）

●研修内容

学生を対象とした在学生調査および卒業時・修了時調査の結果をもとに、本学の教育に関する動向と課題について教育改善 FD が開催された。内容は、2022 年度から 2024 年度までの 3 年間のアンケート結果に基づいて説明された。

▸在学生調査

回答率は年々低下している。学習時間は他学部と大きな差はないが、2 年生が最も長い傾向にあった。学習到達目標の達成度は比較的高い一方で、授業と関係がない自主的な学習は少ない傾向が見られた。また、ディプロマポリシーの認知は学年が上がるにつれて低下しており、周知が課題である。

▸卒業時・修了時調査

学部生の回答率は減少傾向にあるが、教育満足度は 8 割以上と高い水準を維持している。大学院生は回答率が上昇している一方で、満足度はやや低下傾向が見られる。

以上の説明を踏まえ、質疑応答が行われた。学習時間や満足度の高さに対して、実際に学習内容がどの程度身についているのかについては疑問が残り、今後はその把握が必要であるとの指摘があった。また、学部生のアンケート回答率が低いことから、質問項目数や内容について再検討する必要性が示唆された。

開催日時	2026 年 1 月 29 日 16：00～17：00	**開催場所**	保健学科第 2 研究棟 HD1-1
テーマ	心理療法～対人関係療法について～		
講師	大学院医学系研究科保健学専攻 安達 圭一郎	**参加者**	34 名（保健学科教員）

●研修内容

「心理療法～対人関係療法について～」と題して保健学科 FD 研修会として開催した。対人関係療法の定義と目的、効果を奏した事例、日々の人間関係を効果的に進めていくポイントや精神的に病んだ人々への関わり方について、初心者にもわかりやすく、かつ詳細に説明された。

講演後には活発な質疑応答がなされた。

講演会後に紙および google form でアンケートを行い 30 名から回答を得た。

FD の内容を理解できた（86.7%）、新しい視点を得ることができた（86.7%）というポジティブな回答が得られた。また、FD の内容を日々の業務に活かすことができると 66.7%の参加者が回答した。自由記述の欄には「対人関係療法の理論と実践が具体例を交えて分かりやすく示され、学生指導に応用できる視点を多く得られました。」との回答もあった。

＜６．工学部の FD＞

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和７年１１月１２日（水） １３：１０～ Moodle 掲載での動画視聴	**開催場所**	Zoom 及び Ｍｏｏｄｌｅ
テーマ	教育マネジメント室による「高等教育の動向」に関する講演及び質疑応答並びにベストティーチング賞候補者による動画の視聴による教員間の教育力向上を図る取組		
講師	教学マネジメント室；岩野摩耶講師 ベストティーチング賞候補者推薦者；清水里司教授、ROBERTSON ZACHARY　THOMAS　准教授	**参加者**	動画視聴を含めた参加者数 １１２名

研修内容

教学マネジメント室と連携し，「高等教育の動向」に関する講演を，工学部および創成科学研究科工学系教員を対象として実施した。本講演では，中央教育審議会による「知の総和」答申の内容を踏まえ，我が国の高等教育を取り巻く現状と今後の方向性について体系的な説明が行われた。特に，教育研究の「質」の更なる高度化に向けた取組として，学修者本位の教育の実現を前提とした出口における質保証の重要性が強調され，学位の質保証および学生の学習成果の可視化に関する具体的な考え方が示された。

また，質保証の具体的方策として，厳格な成績評価（GPA の適切な運用を含む）や卒業認定の在り方について言及がなされるとともに，認証評価制度の見直しの方向性についても説明があった。加えて，単位制度の基本的な考え方（1 単位 45 時間の学修を標準とし，授業時間と授業時間外学習の双方を含むこと）について改めて確認がなされ，授業外学習時間の確保の重要性が指摘された。さらに，シラバスにおける授業計画，各回の具体的内容，授業時間外学習の内容・時間，および成績評価方法を明確に記載する必要性について，具体例を交えて解説が行われた。大学院教育に関しては，授業科目としての単位修得と研究指導による成果評価を明確に区別する必要性についても説明がなされた。

講演終了後には，「厳格な成績評価」を主題とした質疑応答を実施し，評価基準の明確化や評価方法の妥当性確保，学生の学修成果を適切に反映した成績評価の在り方等について活発な意見交換が行われた。これにより，教員間での認識の共有および今後の教育改善に向けた課題の整理が図られた。

なお，当日参加できなかった教員および講演内容の再確認を希望する教員に対しては，講演動画を Moodle 上に掲載し，フォローアップ視聴を可能とした。その結果，最終的に全教員の 81.8%が本研修を受講し，一定の受講率を確保することができた。

さらに，山口大学において実施されている「ベストティーチング表彰制度」に関連し，工学部からの候補者推薦および全学審査に係る動画視聴を FD 研修として実施した。本制度では，被推薦教員が自身の教育実践の特徴について約 5 分程度の動画を作成し，アクティブ・ラーニングの導入，ハイブリッド型授業の実践，教育効果の高い教材開発等の具体的取組を提示するものである。これらの動画を視聴することにより，優れた教育実践の事例を共有し，教育方法の改善や授業設計の工夫に資する知見の獲得を図った。

以上の取組を通じて，本 FD 研修は，高等教育を取り巻く動向の理解を深めるとともに，教育の質保証および教育改善に向けた具体的な意識醸成に寄与するものとなった。

（２）教育改善

＜活動内容：工学教育研究センター＞

工学部附属工学教育研究センターは，工学部における教育内容の充実および教職員の教育力向上を図り，山口大学の工学教育の改善に資することを目的として，2005 年 7 月に設置された。本センターは，この目的を達成するため，以下の活動を主なミッションとしている。

（1）先駆的な教育実践活動に関する情報の収集・分析および教育改善方法の提案

（2）学部・大学院における教育実践活動に関するデータの分析，取りまとめおよび学内外への公表

（3）センターの持続的発展に向けた運営体制の整備

本センターは，調査研究部門，学生ケア部門，学生教育部門の 3 部門から構成されている。学生教育部門には，「語学教育強化室」，「海外派遣支援室」，「数学統一試験室」を設置し，基礎学力の向上に資する取組を推進している。具体的には，英語力向上のための教育支援，留学プログラムの運営および留学支援，ならびに工学系数学の基礎力向上に関する取組を実施し，グローバルに活躍できるエンジニアの育成を支援している。

語学教育に関しては，来年度入学生より TOEIC 卒業基準を 350 点から 450 点へ引き上げることに伴い，各学科・系の基礎セミナー担当教員を対象とした説明会を実施した。本説明会は前半と後半の二部構成で実施された。前半では，先行して成果を上げている応用化学科における取組をもとに，Moodle を活用した英単語テストの実施方法について，実演を交えた解説が行われた。後半では，TOEIC スコアに応じた学生（300 点未満および 450 点未満）への指導方法について，語学教育強化室が開発した支援ツールを用い，専門分野の教員であっても実施可能な助言・指導の具体例が示された。あわせて，TOEIC の複数回受験を促すための学生指導用ツールの紹介およびその活用方法についても説明が行われた。

また，調査研究部門においては，工学教育に関する調査・分析・研究およびその成果の公表に取り組んでいる。学生ケア部門においては，工学部サロンでの活動を中心に，学生の不安軽減を目的とした修学支援を実施している。さらに，次年度の工学部改組および情報学部の設置に対応し，情報学部 1 年生に対する修学支援も実施する予定である。

山口大学工学部附属工学教育センター　http://eerc.eng.yamaguchi-u.ac.jp/

＜活動内容：工学部サロン＞

平成 18 年度（2006 年度）より，吉田キャンパス研究 1 号館 1 階に「工学部サロン」を開設している。工学部がキャンパスから離れている状況を踏まえ，主に工学部 1 年生を対象として，授業に関する疑問や学習方法，進路に関する相談など，幅広い内容に対応している。

工学部サロンは，工学教育研究センター学生ケア部門の活動の一環として運営されており，教育面および学生生活全般に関する相談に対応可能な場として位置付けられている。サロンには相談員として工学部教員 OB が常駐し，工学部における教育研究の経験に基づき，学生からの相談に対応している。また，工学部に関する各種情報提供も行っており，学生同士の交流の場としても活用されている。

開室時間は月曜日から木曜日の 14 時から 18 時 30 分まで（前期の月曜日は 19 時まで）であり，曜日ごとに担当教員が対応している。さらに，新入生に対してはオリエンテーション等を通じて周知を行い，学生が不安を抱え込まずに相談できる環境の整備に努めている。

加えて，次年度の工学部改組および情報学部の設置に対応し，常盤キャンパスに設置される情報学部の学生支援を実施するため，令和 8 年度 4 月以降は名称を「工学部・情報学部サロン」に変更し，両学部の学生を対象とした支援体制へ移行する予定である。

山口大学工学部附属工学教育センター　工学部サロン

http://eerc.eng.yamaguchi-u.ac.jp/salon.html

＜活動内容：ステップアップノートの配布＞

平成 23 年度（2011 年度）から，工学部の新 1 年生に対して「ステップアップノート」の配布を行っており，令和 7 年度も前年度分をブラッシュアップして発行し、工学部学生のポートフォリオとして利用している。

＜7．農学部の FD＞

（1）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和 7 年 5 月 21 日（水）13:30 ～ 14:00	**開催場所**	農学部本館大会議室
テーマ	学部内 FD 研修会「日本農学賞・読売農学賞受賞記念講演『巨大ゲノムを有するネギ類野菜におけるオミックス統合解析とその遺伝育種研究への運用』～山口大学での 26 年 1 か月の振り返りと今後の 7 年 11 か月の過ごし方～」		
講師	執行　正義　先生	**参加者**	27 名

研修内容

学部教員への FD 研修会として、令和 7 年 3 月に日本農学賞・読売農学賞を受賞された執行正義先生に『巨大ゲノムを有するネギ類野菜におけるオミックス統合解析とその遺伝育種研究への運用』～山口大学での 26 年 1 か月の振り返りと今後の 7 年 11 か月の過ごし方～」というタイトルで記念講演をしていただいた。先生のこれまでの研究生活を振り返りながら、専門の研究内容をご紹介いただくだけでなく、どのような着眼点で研究を行うのか、また発想を転換するにはどうしたらよいかなど、他の教員にも役立つお話をしていただいた。本研修会を通じて、研究課題の設定や進め方、考え方など多くの教員が共有できる機会となった。

開催日時	令和 7 年 11 月 19 日（水）13:30～14:00	**開催場所**	農学部本館大会議室
テーマ	講師派遣型アラカルト FD 研修会「今日の状況を踏まえた入試改善の方向性～３つの観点を柱とした多面的・総合的な評価と入試戦略を考える～」		
講師	アドミッションセンター副センター長・林　寛子　先生	**参加者**	24 名

研修内容

令和 7 年 11 月 19 日の農学部拡大教授会に先立って、アドミッションセンター副センター長の林寛子先生による FD 研修会が開催された。「今日の状況を踏まえた入試改善の方向性」と題して、以下の 4 点についてお話しいただいた。

１，　新学習指導要領および令和の日本型学校教育の概要
　　～大学入試に求められていること～

２，　入学者選抜に関する注目されている話題の論点
　　～年内入試において基礎学力をどのようにして担保するか～

３，　農学部の個別テスト・入試実施状況・入学者追跡

４，　志願倍率の確保の検討について

入試における高大のミスマッチを解消するための新学習指導要領ついて説明いただき、「生きて働く知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力の三つの柱を基に、何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶかを考えてカリキュラムを考えるべきであるとお話された。また、令和の日本型学校教育についても説明いただき、「個別最適な学び」「協同的な学び」の重要性をお話された。大学入試を変えることにより、高校の授業を学習者主体のものに変え、ひいては主体的に学ぶ意欲を持った入学者を増やすことにつながるといった好循環を図ることが必要と話された。

次に、入試関係で話題になっている推薦入試などの年内入試において基礎学力をどのように担保するかについてお話いただいた。小論文を総合問題に変更するなどのお話もあり、農学部においても既に検討済みであることを踏まえ、議論を行った。

また、これまでの農学部の個別テスト・入試実施状況を資料に基づき説明いただき、さらに入試成績と入学後の大学の学業成績など入学者の追跡情報についても説明いただいた。最後に、入試データに基づく農学部の志願倍率の確保に向けての検討課題についてもお話いただいた。

本研修会を通じて、入試のあり方について理解を深めるとともに、改善に向けた課題も共有する貴重な機会となった。

開催日時	令和 7 年 12 月 17 日（水）13:30～14:00	**開催場所**	農学部本館大会議室
テーマ	教育改善 FD 研修会「教学 IR 活用のための各種調査（在学生・卒業時・卒業生）報告」		
講師	教育・学生支援機構教学マネジメント室　藤本　正巳　先生	**参加者**	28 名

研修内容

本研修会では、教育改善 FD 研修会として、教学マネジメント室の藤本正巳先生に「教学 IR 活用のための各種調査（在学生・卒業時・卒業生）報告」と題してお話をいただいた。教学 IR の一環として実施された卒業生・修了生調査の結果をもとに、教育の質の向上に向けた現状分析が議論された。

はじめに、卒業生・修了生調査の目的として、大学・大学院における教育活動や学生支援体制が学生の成長や進路にどのような影響を与えているかを把握し、今後の教育改善に活かすことが確認された。次に、アンケート結果（教育および学生生活における満足度、大学教育を通じた知識や能力の修得状況）が報告された。調査結果から、農学部においては、正課内教育における専門性の習得と、正課外活動を含む教育の双方に対して高い満足度が示されました。なお、研修参加者からは、アンケート結果のサンプル数が少ない点などについて質問があり、調査結果の信頼性などに関する懸念が示された。これを受け、今後の改善策について活発な議論が行われました。 本研修会を通じて、教学 IR データを活用した教育の現状把握と改善の方向性について理解を深めるとともに、調査手法そのものの改善に向けた課題も共有する貴重な機会となった。

（２）教育改善

＜活動内容：授業公開（ピア・レビュー）＞

1. 生物資源環境科学科の授業公開

生物資源環境科学科では，「生物資源環境科学セミナー」として，教員の授業を公開し，複数教員によるピア・レビューを実施してきた。本年度も，公開授業が行われ，教員同士の意見交換が活発に行われた。以下，本年度に実施した 3 回の公開授業を記す。

(i)　LED を用いた光環境制御による野菜工場生産技術の研究・開発
　　令和 7 年 5 月 28 日（水）15:30-16:30 執行　正義　先生
(ii)　日本の食料安全保障と穀物サプライチェーン：南米における大豆生産と持続可能な農業生産の在り方に焦点を当てて
　　令和 7 年 8 月 29 日（金）16:00ˆ17:00 林　瑞穂　先生
(iii)　高層気象観測機器の開発と“天からの手紙を取りに行く“話
(iv)　令和 7 年 11 月 13 日（木）16:15-17:15 鈴木　賢士　先生

2. 生物機能科学科の授業公開

生物機能科学科では，「生物機能科学セミナー」として，教員の授業を公開し，複数教員によるピア・レビューを実施してきた。本年度も，公開授業が行われ，教員同士の意見交換が活発に行われた。以下，本年度に実施した 7 回の公開授業を記す。

(i)　植物をホストとしたモノづくり
　　日時: 令和 7 年 4 月 30 日（水）16:15-17:15 肥塚　崇男 先生
(ii)　酢酸菌に特徴的なペリプラズム酸化系を構成する酵素と反応場に関連する研究
　　日時: 令和 7 年度 5 月 30 日（金）16:00-17:00 片岡 尚也 先生
(iii)　順遺伝学的アプローチへの憧れ
　　日時: 令和 7 年 6 月 27 日（金）16:00-17:00 薬師 寿治 先生
(iv)　トウモロコシの話

＜8．共同獣医学部の FD＞

（1）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2025 年 9 月 22 日（月）	**開催場所**	オンライン形式（Microsoft Teams）
テーマ	令和 7 年度鹿児島大学・山口大学共同獣医学部合同 FD 研修会		
講師	下記の研修内容に記載	**参加者**	70 名（山口大学・鹿児島大学共同獣医学部教員）

研修内容

本学部では鹿児島大学との共同教育体制をとっており、両大学間の強固な連携は、質の高い獣医学教育のために重要である。よって、両大学での合同 FD 研修会を毎年開催している。本年度は下記の内容で開催された。

基調講演

演題：「現代学生の特徴と教職員としての支援のあり方」

講師：高野 明　先生　（東京大学 相談支援研究開発センター 教授）

本基調講演では、学生相談から見た現代学生の特徴のついての紹介があり、そうした現状や課題に対して、教職員としての支援のあり方や、学生の成長を支えるための具体的な方法論を学んだ。講演終了後には、受講者より多くの質問が集まり、活発な意見交換がなされた。

教育ワークショップ

1. 基礎系、 2. 病態予防、3. 産業動物臨床、4. 伴侶動物臨床の 4 項目に分かれ、各項目における山口大学・鹿児島大学間での情報共有、今後の方針についての協議、各種の意見交換が行われた。

1. 基礎系

議題：①各分野・研究室の近況、②実習の状況について、③ポリクリと卒研の両立について、④入試の改革とその影響について、⑤山口大学と鹿児島大学の成績の差について、⑥大学院進学者の確保について

2. 病態予防

議題：①各分野の講義・実習について、②学外実習について、③実習費用について

3. 産業動物臨床

議題：①学生とのコミュニケーションについての情報交換

4. 伴侶動物臨床

議題：①授業担当者の再振り分け、②実習内容の確認、③研修医の教育について

開催日時	2026 年 1 月 21 日（水）	**開催場所**	iCover 101 教室
テーマ	令和 7 年共同獣医学部教育改善 FD 研修会		
講師	岩野　摩耶　先生	**参加者**	35 名

研修内容

「高等教育の動向」と題して講師にご講演いただいた。講演では始めに、国が示す高等教育の目指す姿として「知の総和」とその向上に関する説明があった。次に、教育研究の「質」の更なる高度化の具体的な項目として、「①出口における質保証」と「②認証評価制度の見直し」についての詳細な解説があった。①の質保証に関しては、ディプロマポリシーの認知度に関するアンケート結果や、授業外学習時間に関するアンケート結果に基づき、共同獣医学部ならびに共同獣医学研究科の教育の現状が提示された。②の認証制度については、新たな認証制度への移行とデータベース構築の紹介があり、現状と課題について整理された。最後に、関連する動画コンテンツや web サイトの紹介があった。

講演後の質疑応答では、講演内容に直接関係する教育の質保証に関する質問・意見が教員からあった他、国の示す大学の方向性に関する幅広い質疑もあり、活発な意見交換がなされた。

（２）教育改善

＜活動内容：授業公開（ピア・レビュー）＞

本学部では学部の教育力の向上を図るため、教員相互での授業参観を行っている。2025 年度に公開し参観が行われた授業は以下の通りである（対象学生：共同獣医学部学生、鹿児島大学との遠隔配信講義を含む)。

表 1　実施授業参観一覧

参観日	科目名	担当教員	発信大学	参観者
2025/5/20	獣医病理学 D	森本將弘	山口大学	櫻井優
2025/10/16	データサイエンス技術演習	清水隆	山口大学	渡邉健太
2025/10/29	馬診療学	佐々木直樹	山口大学	角川博哉
2025/11/11	生化学 I	岡本士毅	山口大学	髙木光博
2026/1/14	獣医薬理学 A	佐藤晃一	山口大学	岡本士毅
2026/2/17	獣医解剖学 D	辻尾祐志	鹿児島大学	日下部健

授業参観を行った教員は、授業の内容や方法に対する感想、受講学生に対する感想、自身の授業に生かしたい点等について報告書を提出し（web フォーム)、授業担当教員がその内容を把握できるようにした。また、その中で問題点などが指摘された場合は、授業担当教員がそれに対する対策書を提出する形をとった。

＜活動内容：獣医学セミナー＞

本学部では、教員間のピア・レビューとして本学部教員が持ち回りで講師を務める「獣医学セミナー」を開催している。各教員の研究内容を教員・学生に向けて紹介するセミナーを定期的に開催することで、学部の研究力・教育力の向上を図ることを目的としている。本年度は 6 回開催された。以下に開催概要を記す。

第 100 回獣医学セミナー

演題：ネコの跳躍の生体力学的解析

講師：日暮 泰男 先生（獣医生理学・生化学研究室）

日時：2025 年 4 月 23 日(水) 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

第 101 回獣医学セミナー

演題：国内哺乳動物に寄生する毛細線虫の整理に挑む

講師：佐藤 宏 先生（寄生虫学研究室）

日時：2025 年 5 月 28 日(水) 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

第 102 回獣医学セミナー

演題：がん幹細胞と生体幹細胞に共通する「Stemness」とは

講師：伊藤 晴倫 先生（動物医療センター）

日時：2025 年 6 月 24 日(火) 17:00-18:00

場所：iCOVER1 階 101 室

第 103 回獣医学セミナー

演題：自然宿主モデルとしてのバイオリソースの活用

講師：度会 雅久 先生（公衆衛生学研究室）

日時：2025 年 10 月 8 日(水) 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

第 104 回獣医学セミナー

演題：レトロウイルス受容体の解明

講師：三宅 在子 先生（獣医感染症学）

日時：2025 年 11 月 12 日(水) 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

第 105 回獣医学セミナー

演題：動物のがんに対する新規治療法の開発とその苦悩　～世界とどう戦うか～

講師：水野 拓也 先生（獣医臨床病理学）

日時：2025 年 12 月 10 日(水) 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

＜活動内容：獣医学特別セミナー＞

本学部では学部の研究力・教育力の向上を図るため、各分野の最先端の研究に教員・学生が触れる機会として、外部から講師を招聘して行う「獣医学特別セミナー」を定期的に開催している。本年度は 1 回開催された。以下に開催概要を記す。

第 67 回獣医学特別セミナー

演題：ネコの B 型肝炎ウイルス

講師：齊藤 暁　先生（宮崎大学農学部獣医微生物学研究室）

日時：2025 年 7 月 2 日(水) 16:00-17:00

場所：iCOVER1 階 101 室

＜活動内容：学生授業評価＞

2025 年度の学生授業評価アンケートの結果は以下の通りである。

表 2　学生授業評価アンケート（回答数 500）

出席率	回答数	90%以上（14回以上）	80%以上～90%未満（12～13回）	60%以上～80%未満（9～11回）	40%以上～60%未満（6～8回）	40%未満（6回未満）
あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？	500	446 (89.2%)	50 (10.0%)	4 (0.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
授業時間外学習	回答数	3～4時間程度又はそれ以上	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満
あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？　総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	500	129 (25.8%)	127 (25.4%)	148 (29.6%)	60 (12.0%)	36 (7.2%)
理解度	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	500	180 (36.0%)	251 (50.2%)	59 (11.8%)	9 (1.8%)	1 (0.2%)
目標到達率	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？	500	185 (37.0%)	236 (47.2%)	69 (13.8%)	9 (1.8%)	1 (0.2%)
満足度	回答数	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは，この授業について満足しましたか？	500	277 (55.4%)	164 (32.8%)	40 (8.0%)	12 (2.4%)	7 (1.4%)

＜９．国際総合科学部の FD＞

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2025 年 4 月 9 日　14:40-16:10	**開催場所**	学部棟 4F ワークショップスタジオ
テーマ	PBL 改革推進の方針共有および検討 FD		
講師	学部 PBL 改革推進部会 秋谷准教授	**参加者**	学部教員 15 名程度

研修内容

本研修は、2024 年度に PBL 改革推進部会 WG が中心となって進めてきた議論の方向性について、その 2025 年度から部分的に導入されるその実装にあたり、1）PBL の実施体制等に関する更改の方向性をめぐる内容周知、および、2）ワークショップ形式によるディスカッションにもとづく意見集約、の 2 点を目的として実施した。

開催日時	2025 年 6 月 25 日　14:40-16:10	**開催場所**	国際総合科学部棟 2F 大会議室
テーマ	2030 および 2040 をみすえた学部のありかた検討 FD_1		
講師	学部 副学部長 堀家教授	**参加者**	学部教職員 20 名程度

研修内容

本研修は、2030-2040 をみすえた学部の将来像を学部教員全員で検討し、9 月 3 日に予定された「学長・副学長と学部長との懇談会」で学部側から提示する「“知の総和”答申」等を踏まえた部局将来構想の材料とすることも考慮しつつ、学部教育体制やカリキュラムなど現状におけるさまざまな問題点を洗い出すことを目的とし、2 回に分けて実施する FD のうちその前半として、学部の過去/現在/未来をめぐって、議論の前提をそれぞれ以下の目標にしたがって整理した。【過去】学部設立の基本的な経緯を理解する。【現在】学部現状の把握により危機感を共有する。【未来】「“知の総和”向上答申」について簡単に理解する。

開催日時	2025 年 7 月 23 日　14:40-16:10	**開催場所**	国際総合科学部棟 2F 大会議室
テーマ	2030 および 2040 をみすえた学部のありかた検討 FD_2		
講師	学部 副学部長 堀家教授	**参加者**	学部教職員 20 名程度

研修内容

本研修は、学部の問題点を洗い出し、その解決をさぐるなかで、「“知の総和”向上答申」をこのための積極的な機会と捉えつつ、2030-2040 の学部の将来のありかたを方向づけることを目的とし、2 回に分けて実施する FD のうちその後半として、学部にとって真に必要なこと／必ずしも必要ではないことについて、実現可能性も含めワークショップ形式で多角的に協議し、どこをめざすべきか、そのためにどうすべきか等、学部の将来像を検討した。

開催日時	2025 年 10 月 22 日　14:40-16:10	**開催場所**	国際総合科学部棟 2F 大会議室
テーマ	産学公連携 戦略/プロジェクト立案に関する FD		
講師	URA 義嶋諒也 国際総合科学部担当	**参加者**	学部教職員 20 名程度

研修内容

本研修は、本学大学研究推進機構の産学公連携・研究推進センターより国際総合科学部担当職員を招き、今後の学部教員の研究内容を把握し外部のニーズとの調整から産学公連携のための戦略/プロジェクト立案に向けた最初のステップとして、企業連携とのシーズ（企業の開発に繋がる共同研究）を探るためにURA室の活動内容を紹介のうえ、今後の各教員に対する担当職員による個別ヒアリングの実施について説明した。

開催日時	2026 年 2 月 18 日　13:00-13:30	**開催場所**	国際総合科学部棟 2F 大会議室
テーマ	教育改善研修会「教学 IR 活用のための各種調査(在学生・卒業時・卒業生等)報告」FD		
講師	教学マネジメント室 岩野 講師	**参加者**	学部教員 21 名

研修内容

本研修は、教学マネジメント室より講師を招き、「教学 IR 活用のための各種調査(在学生・卒業時・卒業生等)報告」を学部教員間で共有することを目的に実施され、併せて講師と学部教員との質疑応答や意見交換を通して、今後の学部教育の充実について考える機会とした。

開催日時	2026 年 3 月 3 日　14:40-16:00	**開催場所**	国際総合科学部棟 2F 大会議室
テーマ	教教分離／新新カリキュラムに関する FD		
講師	学部 副学部長 堀家教授	**参加者**	学部教員 23 名

研修内容

本研修では、まず、2028 年度からの実施が予定されるいわゆる「教教分離」について、大学執行部より提供された情報を学部内で共有した。さらに、5月および6月に実施した「学部のありかた検討FD」において提示された各意見をフィードバックしたうえで、2026 年度以降の教育カリキュラムの実施体制および実施内容、さらにはそのために学部が担保すべき専任教員の専門研究分野などをめぐって、次年度の教学委員会において早急に対応すべき問題点と、現状の「新カリキュラム」での改良点を検討する「新新カリキュラム」WG において考慮すべき学部将来構想にかかわる検討材料とを、作業分担のための腑分けを前提に聴取した。

（２）教育改善 ＜活動内容：授業実施方式変更／新規授業科目増設／PBL 実施方針変更＞

在学生アンケートや卒業時アンケートなど、種々の調査において把握した学部教育カリキュラムに対する学生の不満を解消し、需要を充足させるために、2025 年度に以下の 3 点について協議のうえ実施を決定し、2026 年度からの運用を開始した。

○授業実施方式変更
従来の学部教育カリキュラムでは、ほとんどすべての授業科目について、留学学生（インバウンド／アウトバウンドともに）の便宜を考慮しクォーター制で開設してきた。しかしながら、実施には留学は 4-9 月および 10 月-3 月のセメスター単位での動向がほとんどであり、クォーター制によるメリットはあまりないうえに、2 単位ものの科目については週 2 回の授業実施となることから、そのぶん同じ開講期に他の科目を選択可能な時間枠の余地が減るデメリットも生じる。このため、講義が主体となる 2 単位ものの展開科目である「科学技術論」系科目および「文化社会論」系科目については、クォーター制週 2 回での授業実施を改め、セメスター制週 1 回での授業実施を基本とした。

○新規授業科目増設
上記対策によっても、特に「グローバルイヤー」期間に留学しない学生等から寄せられる当該期間中に履修可能な授業が少ない旨の不満は大きく解消できるわけではない。そもそも本学部の 2 年後期-3 年前期の 1 年間は、全学部生が海外留学することを前提にカリキュラム編成されており、コロナ禍以降この前提による制約の度合いが低下し、当該期間中に留学しない学生が相応に増えたにもかかわらずその需要に対応しきれていなかった。このため、これまで「科学技術論」系科目および「文化社会論」系科目を担当してきた学部全教員の新たな授業負担として、比較的に科目開設数の薄い前期を中心に、セメスター制週 1 回で実施される同系科目をそれぞれ 1 科目ずつ新たに開設し、学生にとってのこれらの系列科目の選択肢数を倍増させた。

○PBL 実施方針変更
卒業研究に相当する本学部の PBL において担当教員を割り振るにあたり、従来は各プロジェクトと担当する教員の研究専門分野とのマッチングはほとんど考慮されないどころか、学部創設後の数年は、PBL を仕切る責任教員の側から「PBL の担当に専門分野は関係ない」「教員が PBL にあわせて専門分野を変えろ」との言葉さえ聞かれた。こうした姿勢に対して各教員のなかで不満が募ったほか、創設時に入学してきた最初期の学生らがいざ就職活動に取り組む段階になったころから、就活面接の機会に学部で学んでいる専門性について先方から問われ返答に窮した、との訴えが認められるようになった。このため、PBL の内容に担当教員の専門性を反映できるよう、ここまで個別のプロジェクトのなかで教員個人が努める場合も徐々に出てきていたが、大学院共創科学専攻の新設を機に、従来の PBL のめざすところや仕組みに相応の修正を施すこととなり、WG でその方向性を検討してきた結果、担当教員の研究専門分野を活かした教員/研究室主導型のプロジェクト運営を今後の PBL の基軸のひとつとし、また大学院進学希望者のための専門教育にも適うよう、チーム単位のプロジェクトに加え個人単位での研究プロジェクトも可能となる仕様へと方針を変更した。

＜10. ひと・まち未来共創学環の FD＞

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2026 年 2 月 9 日	**開催場所**	オンライン（Google Meet）
テーマ	教育改善 FD 研修会 教学 IR 活用のための各種調査(在学生・卒業時・卒業生等)報告について		
講師	山口大学 教学マネジメント室 岩野 摩耶 講師	**参加者**	22 名（教員 19 名、事務職員 3 名）

研修内容

大学が自律的な内部質保証を確立し、学生主体の教育へと転換するため、「教学マネジメント」の確立と、それを支える IR の活用について理解を深めることを目的として、本学教学マネジメント室の岩野摩耶先生に講演をしていただいた。

教学マネジメント指針、IR データの活用と分析、具体的な教育改善に向けた取り組み等について、他学部の例を交えながら具体的な説明をしていただき、活発な質疑応答も行われた。

本研修を通じて、単に授業を行うだけでなく、データを用いて客観的に教育効果を測定し、組織的に改善していくサイクルの重要性を理解することができた。

開催日時	2026 年 2 月 10 日	開催場所	オンライン（Google Meet）
テーマ	講師派遣型 FD 研修会 障害等のある学生の修学支援ニーズと配慮の動向		
講師	学生特別支援室（SSR） 岡田 菜穂子 准教授 松尾 理佳 カウンセラー	参加者	22 名（教員 19 名、事務職員 3 名）

研修内容

障害のある学生に対する授業や評価に関する「合理的な配慮」と、このような学生たちに対応する上での教員側の心構えを学ぶことを目的として、本学学生特別支援室の岡田菜穂子先生と松尾理佳カウンセラーに講演をしていただいた。

学生特別支援室（SSR）の役割と体制、修学支援の現状、支援ニーズの多様化と課題、修学支援の手続きと「配慮願」等について、具体的な説明をしていただき、活発な質疑応答も行われた。

障害学生への支援は、個々の困難さに寄り添いつつ、教育の質を維持するための適切な調整（合理的配慮）が不可欠であることを再認識した有意義な内容であった。

（２）教育改善

＜活動内容：SPARC 教育プログラムにおける授業評価と自己評価＞

本学環のカリキュラムは、「SPARC 教育プログラム」を中心に構成されている。本プログラムでは、学修成果および教育成果を可視化し、総合的に点検・評価することで教育改善を図ることを目的に、アセスメントプラン（点検・評価方針）を定めている。

このプランに基づき、授業科目レベルの評価・改善として、連携開設科目および共同開設科目の終了時に学生による授業評価を実施した。

また、教育プログラムレベルの評価・改善では、受講を通じて身に付けるべき「6 つの資質・能力」について、独自のルーブリックを用いた自己評価を毎年行うこととしている。令和 7 年度は、プログラム開始時となる 1 年次のオリエンテーションにて最初の自己評価を行った。（自己評価は、プログラム開始時、1 年次終了時、2 年次終了時、プログラム終了時の計 4 回実施する予定である）

＜活動内容：学修の計画（ポートフォリオ）＞

1 年次の「基礎セミナー」において「学修の計画（ポートフォリオ)」の趣旨を説明し、その作成を指導した。学生が各自で重視する地域課題に応じた計画を立てられるよう、将来の進路等に合わせた複数の履修モデルを提示している。

これに基づき、プログラムや履修科目の選択、「DX による地域課題解決（PBL)」の実習派遣先の決定、さらには卒業研究のテーマ設定に至るまで、4 年間の学修段階に応じたきめ細やかな指導を行う。指導にあたっては、修学支援教員（チューター)、PBL 担当教員、卒業研究指導教員が連携して各年次で対応し、本学環が掲げる人材養成の完遂と教育の質保証を実現する。

＜11. 人文科学研究科の FD＞

（１）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	2026 年 2 月 16 日	**開催場所**	人文学部大講義室
テーマ	大学院生の指導を考える		
講師	修士課程の指導を終えた教員	**参加者**	教員 14 名

研修内容

大学院の修士論文発表会の後（16 時 45 分～）、人文科学研究科の FD 研修会を実施した。具体的には、修士課程の指導を終えた教員を中心に、指導にあたっての工夫・苦労等を簡単にご紹介いただき、研究科教員の間で改善点や問題意識を共有していった。

学部の指導とは異なり、より専門的な領域の指導が必要となるため、共有される情報も専門分野に特化した議論が多く散見された。たとえば当日話し合われた内容の一部として、「江戸川乱歩のデータベースを山口大学に図書館予算で購入してもらったことが大いに助けになった。もうひとつには、今年度日本近代文学会の九州支部が山口大学で開催されたが、たまたま立教大学（以前に山大にいらした）の乱歩研究者が発表する機会があったため、発表後に質問をしにいったところ、交流が生まれて資料等の情報交換が可能になった」など、研究内容そのものだけではなく、研究環境をどのように整備していくか、などの議論も重ねられた。

大学院の授業は少人数であるため、全体を通しての総論としてまとめることは難しい。学生それぞれの研究活動だけでなく、それをどのように専門の領域へと接続していくかということも重要な課題として議論された。



（２）教育改善

（１）修士論文発表会

令和 7 年 2 月 16 日に修士論文発表会が行われ、人文科学研究科を修了する 8 名の発表が行われた。発表時間は 1 人 25 分で、質疑応答の時間が 10 分程度設けられる。同発表会では、専門領域以外の教員、院生が発表者に対して質問することが通例であり、2025 年度も活発な議論が行われた。各教員は修士論文の内容や質疑の様子を見て、自身の指導の在り方を見つめなおし、再考する機会となっている。

（２）教員授業評価

教員授業評価において「学生は、授業の内容をよく理解できたと思いますか？」という問いに関して、前期は「そう思う」「ややそう思う」という回答が多く、「どちらともいえない」という回答は 1 件だけだったが、後期は「どちらともいえない」という回答が 3 件と増えるようになる。これは後期の授業が前期と比べて、より専門性が求められるためだと思われる。教員の多くは、授業での評価を課題レポートや試験ではなく、授業内でのディスカッションから判断しており、これは専門性が高まる大学院の授業と学部の授業との違いといえる。専門性が高くなるにつれて、他の専門領域からの受講生の理解度は下がる傾向にある。ただ回答の中には、「専門外の学生も一緒に参加している状態であったが、自身は専門分野の学生としての意識も高く持ち、努力を惜しまずに積極的に能動的な修学を継続的に行っていた」という回答があり、必ずしも専門外の院生が授業に参加することでマイナスに働くことばかりではないことがうかがえる。

大学院の授業において専門性が高くなることは当然のことであり、健全な大学院教育が行われていることの現れであると考えられる。人文科学研究科は在籍大学院生数が少ない少人数研究科であるため、院生の研究内容、研究状況に応じて個別対応が求められることが多い。授業における専門性の保証と他の研究領域からの受講生の兼ね合いに関しては、引き続き今後の検討課題としたい。

＜12. 教育学研究科の FD＞

（１）研究科主催 FD 研修会

開催日時	2026 年 2 月 4 日（木）	**開催場所**	教育学部第 3 会議室
テーマ	「学校・教育委員会関係者対象」調査から今後の学修マネジメント改善を考える		
講師	佐々木 司	**参加者**	学校経営コース教員 7 名（全員）

研修内容

本研修は、毎年実施している「学校・教育委員会関係者対象」調査のうち、2026 年度に実施したものを、学校経営コース教員 7 名（全員）がそれぞれ事前に目を通してきて、それに基づきながら、学校経営コースの課題、特に今後の学修マネジメント改善をどのように進めていくことができるかについて語り合った。基本的には、ディスカッション形式を採用したが、司会進行はコース長である佐々木が務めた。また、本 FD 終了後には、およそ１週間程度時間をとって、次年度に向けた改善アイデア、FD 計画等について各参加者から意見、その他を出してもらった。

この「調査」は毎年２月末までに、大学院生の所属学校長、教育委員会関係者（学校教育課長など）から、院生の成長の様子、大学院における学び、学校実習の成果等について意見を聞いているものである。学校や教育委員会関係者からの評価は概ね肯定的なものではあったが、さらなる発展を期して多くの意見、アイデアが参加者から出された。ここでは、その一部を紹介する。

・教職大学院の広報活動の充実が望まれる。リーフレットはその手立ての一つである。中間発表会・成果報告会の開催案内も、もっと早い時期にする必要がある。
・「調査」は、対象者本人が回答する形がよい。（現状は、本人が直接回答を記入するのでも、大学教員が意見等を聞き取って記入するのでもよいとしている）
・院生が「大学院の創り手」として、大学院運営に参画する仕組みづくりを求めたい。
・他大学の教職大学院から学ぶ機会を設けてはどうか。
・年度初めに、教職大学院と学校・教育委員会が、教職大学院での学修等について情報を共有するオンライン会議を実施することが進んでおり（2026 年 5 月に実施する計画）、こうしたことはとてもよいことである。
・院生一人一人の実態に応じた、「個別の支援、指導を組織としてどう実現していくのか」ということが、これから更に求められてくる。体調や遠距離通勤等への配慮などをどのように行うのか、協議する機会をもつとよい。
・一部に、昨年度と同じ問題が提起されている。これについては大学教員が対応する必要がある。
・大学院における 5 コマ目の時間帯は、「現職教員」院生にとっては勤務時間ではない。彼らを労働者として扱う必要もあり、その方向で対応すべきではないか。

これらの意見を踏まえて次年度の FD を計画実施することで、大学教員の力量およびコースの組織力をより高度なものにしていきたい。

開催日時	令和７年 11月25日（火） 16：00～18：00	**開催場所**	Zoom によるオンライン開催
テーマ	省察的実習（Reflective Practicum）をコアとした教職大学院カリキュラムの推進 ～実践の省察の深まりをいかにして保障するか～		
講師	大阪教育大学 八田幸恵 先生ほか	**参加者**	本学研究科から５名

●研修内容

ｵｰﾌﾞﾆﾝｸﾞ 16:00-16:05
第１部 16:05-17:00 シンポジウム「省察概念をめぐる学術動向と省察的実践者の教育」
話題提供１ 省察概念をめぐる学術動向 大阪教育大学 八田幸恵 先生
話題提供２ 京都教育大学連合教職大学院 学校臨床力高度系・実習セミナーにおける協働省察
京都教育大学 徳永俊太 先生
話題提供３ 省察的実践者を育てる３つのコーチング 福井大学 木村優 先生
コメント ３つの話題提供へのコメント 学習院大学 秋田喜代美 先生
第２部 17:10-17:55 グループ対話（小グループで話題提供の感想と取り組み共有）
ｸﾛｰｼﾞﾝｸﾞ 17:55-18:00

●話題となったこと

全国 54 ある教職大学院では、
（１）学校現場における職務についての広い理解をもって自ら諸課題に積極的に取り組む資質能力を有し、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員
（２）学校現場が直面する諸課題の構造的・総合的な理解に立って、教科・学年・学校種の枠を超えた幅広い指導性を発揮できるスクールリーダー
の育成を目指し、それぞれ「学校における実習」（10 単位以上）を中核にすえながら院生の実践的な学修と教育実践（臨床）研究を組織している。
この「学校における実習」において、院生がそれぞれの実習を通じた実践研究活動を省察し、つづく実践と研究の見通しを立て、それらを不断に変革し続ける学修を保障することが重要になる。しかし、これまで教職大学院協会として、各教職大学院の実践省察のデザイン、そこで重要になる考え方、授業と教育課程を編成する中での具体的な工夫点・苦労点は十分に共有してきたとは言えない。

●参加者のコメント

今回の公開研修では、省察的実践と省察的実習に関する考え方を参会者と共有し、各教職大学院の授業改善とカリキュラムの高度化に資する知恵を協創することができた。

山口大学教職大学院においても「新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員」や「幅広い指導性を発揮できるスクールリーダー」育成のために、組織だった取組の強化を図っていく必要を改めて痛感した。

開催日時	2026年2月4日（水）	開催場所	教育学部C棟第424演習室
テーマ	日本教職大学院協会研究大会の実践研究成果発表について		
講師	藤上　真弓　氏　（山口大学教育学研究科教育実践開発コース教授）	参加者	5名

研修内容

特別支援教育コースＦＤ研修会として、山口大学教育学研究科教育実践開発コースの藤上真弓教授をお招きし、研修会を実施した。

1　目的

令和９年度に本コースが日本教職大学院協会研究大会において行う予定である実践研究成果発表の概要を知り、発表に向け準備を始める契機とする。

2　内容

令和４年度研究大会で教育実践開発コースが行った発表について、当時のエピソードや発表内容に関する講義を受け、本コースの発表に向け必要な準備や今後の課題等について意見交換をした。

【講義の概要】

・発表は、研究内容の紹介ではなく、研究体制の山口県らしさやコースの特色等の内容に絞った。他県の発表にも似た傾向があり、具体的な研究はポスターセッションの方で取り上げられることが多い。ポスターセッションには、毎年本科学校経営コースが参加し、個人の発表を行っている。

・小規模なコースであるという特徴を生かすため、コース全員で発表することとし、院生は実習校での活動を報告した。ただ、ストレートマスターにとって、教授陣に交じっての発表は心理的負担が大きかったようだ。なお、他県でも複数人で発表するということはよく行われていた。

・準備で一番時間がかかったのは、発表のテーマをどうするか、何をコースの売りとして取り上げるか、誰が何を発表するか等を考える過程であった。

【質疑応答及び意見交換】

・院生の旅費等について、予算や補助金制度を事前に確認しておく必要がある。先方の受け入れ人数も確認したほうがよい。

・参考のため、来年度の研究大会に参加するとよい。オンラインで参加できるはず。

・部会の運営については、その都度、事務局から指示があるので心配無用。

・発表の時間は、発表40分、質疑応答20分程度か。

・成果報告書作成のため、発表全体の概要を２ページ程度にまとめることが求められる。

・特別支援教育コースには、ストレートマスターと現職教員という立場の違う者が共に学ぶという特徴があると考えているが、他県の状況はいかがか。→コースそのものがないという大学もある。

【事後の利活用】

今回の研修は、実践研究成果発表に向けて、具体的なイメージを持ち、必要な準備について検討を始める契機となった。併せて、発表のテーマや発表形態についてもご示唆をいただく貴重な機会であった。今後は、講義内容を参考にしながら、令和９年度の発表が充実したものとなるよう、コース一丸となってしっかりと準備していきたい。

（２）教育改善

＜活動内容：学生授業評価・教員授業自己評価＞

・概要

学生授業評価・教員授業自己評価を行い、その分析を行った。

・結果

授業評価の実施率は次の結果となった。

学生授業評価		対象時間割数	実施時間割数	実施率
	教育学部	451	361	80.0%
	教育学研究科	33	18	54.5%

教員授業評価		対象時間割数	実施時間割数	実施率
	教育学部	449	380	84.6%
	教育学研究科	102	86	84.3%

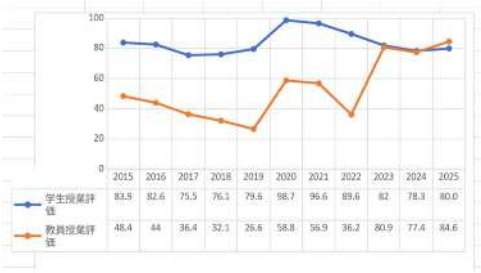
授業時間外学習の結果は次のようになった。

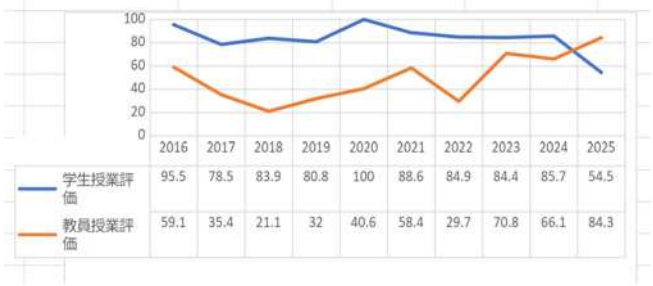
	3時間程度又はそれ以	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満	計
教育学部	386	471	740	513	475	2585
教育学研究科	14	27	14	6	2	63

	3時間程度又はそれ以	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満
教育学部	14.9%	18.2%	28.6%	19.8%	18.4%
教育学研究科	22.2%	42.9%	22.2%	9.5%	3.2%

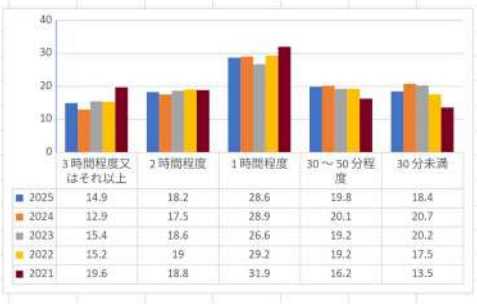
・課題や改善活動

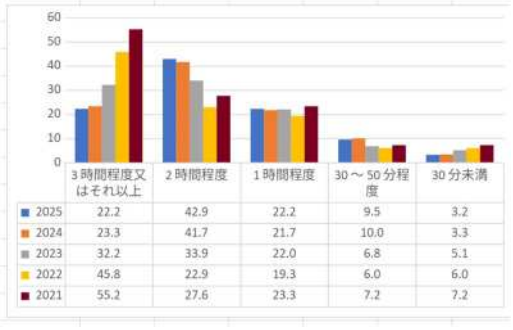
授業評価の実施率の経年変化を下に示す（左が学部授業、右が大学院授業）。教員の授業評価率が上昇していることがうかがえる。





授業時間外学習の経年変化を下に示す（左が学部授業、右が大学院授業）。





概ね、例年通りであるが、大学院授業に於いて授業時間外学習が増加していることがうかがえる。

＜13. 経済学研究科の FD＞

経済学研究科では、FD 研修を経済学部と共に行うので、＜３．経済学部の FD＞の項で述べた FD 研修会が本研究科の FD 研修会であるという位置づけである。

＜14. 医学系研究科の FD＞

平成 21 年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科の FD 企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、学部の FD 活動に参加する形で FD 活動を行った。具体的活動内容に関しては、５．医学部の FD を参照されたい。

＜15. 創成科学研究科の FD＞

創成科学研究科の FD 活動は、それぞれの教員が所属する学域に関連する学部 FD 活動に参加する形で行われた。具体的な活動内容に関しては、理学系学域所属教員は II－4「理学部の FD」、工学系学域所属教員は II－6「工学部の FD」、農学系学域所属教員は II－7「農学部の FD」を参照されたい。

＜16. 東アジア研究科の FD＞

（1）学部・研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和 6 年 11 月 11 日、13 日、15 日	**開催場所**	経済学部　第一大講義室
テーマ	共同演習の課題と改善策		
講師	古賀大介	**参加者**	28 名

研修内容

本研究科は、個別研究指導に加えて、次節で詳述する共同演習（基盤演習およびプロジェクト演習）を用いた集団指導体制を備えている点にその特徴がある。本研究科は、この集団指導体制をさらに充実させるための検討を進めてきた。FD 研修会においては、講座ごとに次のような問題意識や改善の方向性が示された。

【アジア比較文化コース】
- 研究発表を学外で年 2 回以上行うなど、情熱をもって研究を進める院生の姿を見られた。
- 分析結果をどのようにまとめるか、今後の課題ではありつつも期待できる報告があった。

【アジア経済・経営・法律コース】
- 報告者の中には、分かったことをすべて報告しようとする者もいるが、情報を取捨選択して報告内容を組み立てるべき。
- 報告時間の範囲内で自身の研究結果を効果的にアピールできていない報告が見受けられた。

【アジア教育開発コース】
- D1 時の基盤演習と比較して飛躍的に成長した院生の姿も見られた。
- 留学生の中には日本語の執筆能力が十分ではない人物もいるため、指導に苦慮している。
- 自身の専門と全く無関係の分野の報告については、コメントや評価が出来かねる。
- 研究の背景や目的、発表予定の投稿論文の内容についての説明が不足している報告がある。

なお、準備論文報告会における報告者 6 名の評価結果（各 5 点満点）は下記の通りである。概ね良好な評価となっており、共同演習における指導の成果が反映されたと考えられる。

	報告者 A	報告者 B	報告者 C	報告者 D	報告者 E	報告者 F
全体評価	4.09	4.09	3.00	4.30	4.36	4.14
研究の背景と目的の明確さ	4.36	4.27	3.11	4.50	4.36	4.00
論文構成の妥当性	4.09	3.82	3.00	4.30	4.36	3.71
先行研究の網羅性	3.82	3.55	3.00	4.44	3.90	4.00
資料・データの十分性・妥当性	3.64	3.73	2.89	4.33	3.90	4.17
挙証の論理性	3.64	3.82	3.00	4.56	4.20	4.00
分析方法の妥当性	3.82	3.82	3.00	4.56	4.10	3.67
独創性(オリジナリティ)	3.82	4.09	3.11	4.56	4.55	4.14
研究の進捗度	3.82	4.09	2.78	4.60	4.18	4.29
プレゼンテーション評価	3.73	4.36	2.89	3.70	4.18	4.29

（２）教育改善

＜活動内容：授業公開＞

博士後期課程のみという性質上、東アジア研究科は基本的に講義形式での授業を重視していない。当研究科は、設置目的の通り「問題解決のための高度な専門知識を発揮しうる人材の養成、指導的高度専門職業人の養成」を目指している。また、ディプロマ・ポリシーが示す通り「独自に問題を立て、研究を遂行して成果を生み出すことができる自立的研究能力」を養成することを主眼としている。このため、学識を授けるという意味合いの強い講義形式の授業よりも、各院生に対する個別研究指導が主な形式となっている。

とはいえ、授業公開に類する内容として、以下の取り組みを行っている。

（１）集団指導の場としての「基盤演習」「プロジェクト演習」

上記の特性を持つ当研究科は、カリキュラム・ポリシーに従って、1 年次に「基盤演習」を、2 年次に「プロジェクト演習」を課している（以下「共同演習」）。共同演習はコース別に実施されている。実施手法としては、学生の研究報告に対して複数の教員がコメント・意見を述べる集団指導体制を取っている。

この共同演習は、教員間でお互いの指導を確認し合う間接的な授業公開の場となっている。参加教員からのコメントは指導教員にとっても貴重な示唆を与えるものであり、自らの研究指導へのヒントや改善の契機となっている。この意味で、共同演習は、間接的なピア・レビューの効果を持ち、当研究科教員の研究指導能力向上に重要な意義を有する。

（２）個別研究指導の場としての「特別研究」

当研究科の主たる教育活動は、在籍院生に対する個別の研究指導である。「特別研究」がこれに相当する。同科目の内容は、基本的に各院生の研究テーマや研究の到達状況に応じて柔軟に調整している。このため、同科目を公開し、ピア・レビューの対象とすることは難しい。

一方、当研究科では研究指導の中核を担ってきた経験豊富な教員の定年退職が見込まれている。当研究科の研究教育能力の拡充のためには、「特別研究」における研究指導のノウハウを研究科全体として蓄積し、次世代を担う若手教員に継承することが重要な課題である。

＜活動内容：教育方法や授業形態の改善＞

前項にも述べたように、東アジア研究科は個別研究指導に加えて、共同演習を用いた集団指導体制を備えている点に特徴がある。本研究科は、この集団指導体制をさらに充実させるための検討を進めている。例えば社会動態講座内では、2021 年 12 月より「共同演習に関するワーキンググループ（以下、WG)」を設置しており、今後の指導運営体制に関する協議・検討を行ってきた。これまでの議論のうち、主なものは以下の通りである。

- 基盤演習における指導内容が翌年のプロジェクト演習の担当教員に十分に引き継がれていない場合がある。このため、両演習間の関係をより緊密にすべき。
- 院生の報告に対して、主指導教員がどの程度まで前面に立って他の教員に解説を加えるか、検討の余地がある。
- 英語話者と日本語話者の混在する環境で、意思疎通・コミュニケーションが不十分になる。
- 一回あたりの報告者数が多い場合、時間的制約から十分な議論が行えない場合がある。
- 報告資料の体裁や内容が報告者によって異なり、前回との相違や進捗・改善状況が明確でない場合がある。
- 報告者から多量の資料が事前に提供され、かつどの資料が重要なのか判別できない場合、資料を読み込むための教員の負担が大きくなる。
- 自らの専門外の報告に対して、教員がどのようにコメントし、学生の報告に貢献するか。

上記問題を一挙に解決することは困難であるが、これまでの議論の結果、例えば社会動態講座では次のような検討がなされた。

- 共同演習オリエンテーション（ガイダンス）の実施：オリエンテーションを通じて、共同演習でのルールを周知し、再度確認する。
- 学生便覧に記載されている基盤演習・プロジェクト演習の目標をより詳細化し、上記オリエンテーションでも周知する。
  - 基盤演習の目的：博士論文のテーマ、編別構成設定、博士論文作成に必要な基本的な学術作法の修得
  - プロジェクト演習の目的：基盤演習での習得内容を土台とした完成度の高い博士論文（特に編別構成）の作成
- 対外的 PR や入試選抜の改善が可能か、検討課題とする
- 院生の報告に先立って主指導教員がこれまでの指導経緯や報告の趣旨を簡単に説明するなどして、参加する教員の理解を深めるべき。

これらについて、同講座内で改善策を実施する予定である。また、同改善策の結果を見つつ、検討と更なる改善を行なっていく。

上記課題については、翌年度に更なる改善が可能かどうかを検討していく。なお、例年行ってきた各講座での研究指導 FD（第 2 節参照）と共同演習に関する検討を相互に関連させつつ、東アジア研究科の FD 活動のあり方に新たな方向性を見出すことが期待される。

＜17. 技術経営研究科の FD＞

（1）大学院技術経営研究科主催 FD 研修会

開催日時	令和 8 年 3 月 3 日　13 時 15 分～14 時 15 分	**開催場所**	大学院技術経営研究科会議室 および オンライン（Google Meet）
テーマ	共創を通じたまちづくり　―ソフトとハードとひとづくり―		
講師	中原　康平　様 森ビル都市企画株式会社　事業企画部 プロジェクトマネージャー （山口市産業交流拠点施設　指定管理者 施設運営責任者）	**参加者**	10 名

研修内容

共創を通じたまちづくり　―ソフトとハードとひとづくり―

中原　康平　氏　森ビル都市企画株式会社　事業企画部　プロジェクトマネージャー



日程：令和 8 年 3 月 3 日（火）

時間：午後 1 時 15 分 ～ 午後 2 時 15 分

実施方法：オンライン（Google Meet）

講師：中原康平氏、森ビル都市企画株式会社　事業企画部　プロジェクトマネージャー

対象：大学院技術経営研究科　教員

概要：従来のまちづくりは都市計画家が主導して進めるものでしたが、近年はその様相が変化し、ソフトとハードが一体となった計画が不可欠となっています。本講演では、それらを起動させる「ひと

づくり」に焦点を当て、その構想と実態についてお話しいただきました。

本研修では、講師ご自身の行動指針である「理論（仮説）→実践→省察」の学習サイクルを出発点に、都市を「そこに集う人間」の側から捉える視座が示された。具体的には、集合的無意識やリチャード・フロリダの「クリエイティブ都市論」を手がかりに、個人・社会・提案の循環が地域の持続可能な発展をもたらすという枠組みが提示された。

後半では、講師が施設運営責任者を務める山口市産業交流拠点施設（KDDI 維新ホール）を事例として、公共施設整備と民間再開発、人材育成を一体で進める地方都市型の共創モデルが紹介された。ソーシャルブレックファストや CO-維新ランチ会といった交流事業、山口大学の講義と連携した「風土と感性プロジェクト」、経験学習モデルに基づくアカデミーハウスの PBL など、ハード（施設）とソフト（事業）を「ひとづくり」がつなぐ実践が具体的に共有され、教育プログラム設計への示唆が得られる内容であった。

（2）教育改善

＜活動内容：技術経営教育の質の保証と改善に向けた検討＞

社会人ならびに留学生を対象にした技術経営教育の質の保証と改善に向けた検討

1．背景

情報通信技術(ICT)の高度化に加え，生成 AI の急速な普及により，社会経済が大きく変化している。この状況の下，新たな知識・スキル・思考力を獲得するため，社会人が大学で学び直す必要性は一層高まっている。また，グローバル化の進展により，海外大学と共同で国際的に活躍する人材を育成する必要性が生じている。これらは本学が「明日の山口大学ビジョン 2030」において掲げている「高度な専門性と社会性を持つ指導的人材の育成」や「グローバル力を強化する大学院教育の推進」といった目標と同じ方向性を持つものである。これらを受けて本研究科では，「国内では西日本地域において，国外では東アジア・東南アジアにおいて<技術経営>者を目指す人々の『最優先志望』となることを目指す」という中長期ビジョンを掲げ，福岡・広島教室においては日本人社会人を，宇部教室においては留学生を対象とする技術経営教育を実施した。

令和 7 年度は，前年度に方針として定めた「対面講義を教育の基軸とし，ハイフレックス型授業を補完的に配置する」体制の定着を図るとともに，FD 研修会等を通じて，教員・学生双方の生成 AI 活用能力および実践的な課題解決能力の向上に取り組んだ。

２．今後の課題

2.1 教育システムの最適化と効率的運用

ハイフレックス型教育を実現するためのシステム基盤は既に整備され，対面講義を主軸とした運用も定着しつつある。今後は，システムの常時稼働から必要に応じた選択的活用への移行をさらに進め，メンテナンス負荷の軽減とリソースの効率的配分を実現する。

あわせて，トラブルシューティング体制の簡素化，必要最小限の技術アップデート，および対面講義との円滑な連携を重視したシステム運用方針を継続的に見直す。また，配信機材の更新と運用手順の標準化により，特定の担当者に依存しない安定的な運用体制の確立を目指す。

2.2 教員のデジタルスキル向上と生成 AI 活用能力の開発

生成 AI の活用は，試行の段階から教育・研究業務への実装の段階へと移行しつつある。教員が生成 AI を学習支援ツールやビジネス課題の解決支援ツールとして効果的に活用できるよう，継続的なトレーニングプログラムを整備する。特に，AI を用いた教材作成，学生指導における活用方法，研究支援への応用など，教育現場での実践的な活用スキルの習得を重視する。

また，令和 7 年度の FD 研修会では，地域における共創とまちづくりの実践を題材に，理論・実践・省察を往還する学びの設計について知見を得た。今後は，実務家との連携を通じて得られた知見を授業設計や特定課題研究の指導に反映させ，デジタル技術の活用と実践的な教育内容の両立を図る。

2.3 学生の AI リテラシー向上と研究への活用指導

社会人大学院生に対しては，従来のデジタルリテラシー向上に加えて，生成 AI の適切な活用方法についての指導を強化する。ビジネス課題解決における生成 AI の効果的な活用法，学術的な研究活動での倫理的な使用方法，情報の真偽判定能力の向上などを包括的に支援する。

特に特定課題研究においては，生成物の検証，引用・出典の明示，機密情報の取扱いといった留意点を明確に指導し，AI の活用が学生自身の思考力・分析力の育成を損なうことのないよう配慮する。留学生に対しては，日本語による論述の支援としての活用と，自らの思考の言語化との両立に留意した指導を行う。

2.4 対面教育を基軸とした最適な教育形式の選択

対面講義の高い満足度を維持しつつ，技術経営研究科で推進してきた特定課題研究発表のオンデマンド化の成果を活用し，対面とオンラインの最適な組み合わせを追求する。

対面でのディスカッションや実践的な演習を重視しながら，やむを得ない事情での欠席者への配慮としてハイフレックス型配信を実施する。特定課題研究発表においては，オンデマンド視聴と対面でのライブディスカッション・フィードバックセッションを組み合わせた形式の運用を進める。

これらの取り組みにより，社会人大学院生および留学生が，現代のビジネス環境で求められる最新の技術活用能力と実践的な課題解決能力を身につけられる教育環境を整備する。

＜18. 共同獣医学研究科の FD＞

共同獣医学研究科の FD 活動は、全て学部の FD 活動と区別なく実施されたので、具体的な活動内容に関しては、＜８．共同獣医学部の FD＞を参照されたい。

令和７年度　山口大学　教学委員会　名簿

部局名	職　名	氏　名	任　期
	副学長（教育学生担当）	葛　　崎偉	
教育・学生支援機構	教学マネジメント室長	野崎　浩二	
〃	教育支援センター長	野崎　浩二	
〃	学生支援センター長	竹松　葉子	
〃	キャリアセンター長	堤　　宏守	
〃	健康科学センター長	山本　直樹	
人文学部	教　授	武本　雅嗣	6.4.1～8.3.31
〃	教　授	山口　　睦	7.4.1～9.3.31
教育学部	教　授	柴田　　勝	6.4.1～8.3.31
〃	教　授	中野　伸彦	7.4.1～9.3.31
経済学部	教　授	櫻庭　　総	7.4.1～8.3.31
〃	教　授	西尾　　建	7.4.1～8.3.31
理学部	教　授	宮澤　康行	7.4.1～8.3.31
〃	教　授	末竹　規哲	7.4.1～9.3.31
医学部	教　授	村上　京子	7.4.1～9.3.31
〃	教　授	太田　康晴	7.4.1～9.3.31
工学部	教　授	若佐　裕治	6.4.1～8.3.31
〃	教　授	吉本　　誠	7.4.1～9.3.31
農学部	准教授	佐合　悠貴	6.4.1～8.3.31
〃	教　授	阿座上 弘行	7.4.1～9.3.31
共同獣医学部	准教授	櫻井　　優	6.4.1～8.3.31
〃	准教授	渡邉　健太	7.4.1～9.3.31
国際総合科学部	教　授	堀家　敬嗣	6.4.1～8.3.31
〃	教　授	阿部　　新	7.4.1～9.3.31
ひと・まち未来共創学環	教　授	熊谷　武洋	7.4.1～9.3.31
事務局	学生支援部長	湊　　由己	
〃	学生支援部教育支援課長	椛村　裕二	
〃	学生支援部学生支援課長	中井　智明	
〃	学生支援部キャリア支援課長	竹安　　勉	

令和７年度 山口大学 各学部・研究科教育改善コーディネータ 名簿

部 局 等	職 名	氏 名
人文学部 人文科学研究科・人間社会科学研究科（人文科学専攻）	准教授	小林　宏至
教育学部 教育学研究科・人間社会科学研究科（臨床心理学専攻）	教 授	白石　敏行
経済学部 経済学研究科・人間社会科学研究科（経済学・経営学専攻）	教 授	寺地　伸二
理学部 創成科学研究科（理学）	教 授	宮澤　康行
医学部（医学科） 医学系研究科	教　授	白澤　文吾
医学部（保健学科） 医学系研究科	教　授	矢田　浩紀
工学部	教　授	若佐　裕治
創成科学研究科（工学）	准教授	堀田　一敬
農学部 創成科学研究科（農学）	教　授	阿座上　弘行
共同獣医学部 共同獣医学研究科	准教授	渡邉　健太
国際総合科学部 人間社会科学研究科（共創科学専攻）	教　授	堀家　敬嗣
ひと・まち未来共創学環	教　授	熊谷　武洋
東アジア研究科	准教授	八代　　拓
技術経営研究科	教　授	大島　直樹

令和７年度　山口大学　教学マネジメント室　名簿

室　長	野崎　浩二	学長特命補佐（大学院創成科学研究科（理）　教授）
副室長	湊　　由己	学生支援部長
室　員	岩野　摩耶	教育・学生支援機構　教学マネジメント室　講師
	藤本　正己	教育・学生支援機構　教学マネジメント室　講師
	麻生　稔彦	副学長補佐（大学院創成科学研究科（工）　教授）
	谷部　真吾	副学長補佐（人文学部　教授）
	和泉　研二	教育・学生支援機構　副機構長（教育学部　教授）
	竹松　葉子	教育・学生支援機構　副機構長（大学院創成科学研究科（農）教授）
	林　　寛子	教育・学生支援機構　アドミッションセンター　准教授

令和７年度　山口大学の FD 報告書
令和８年１０月発行

編集・発行　山口大学教育・学生支援機構
山口大学教学委員会
山口市吉田 1677-1
TEL（083）933－5060（学生支援部教育支援課）